【論　文】

作曲家古賀政男の歴史的考察

――歌謡曲の源流――

刑部芳則

【要旨】

本論では、作曲家古賀政男が「歌謡曲の源流」というべき多種多様な路線の基礎を築いた点について検討する。古賀が映画主題歌や挿入歌を量産することで、ヒット曲の増産に拍車をかけた点を検討する。他の作曲家とは異なり、カバー曲やリメイク曲に力を入れていた点について検討する。従来の古賀政男研究では見落とされてきた新発見の歴史的事実を証明する。

はじめに

作曲家古賀政男は令和六年（二〇二四）に生誕一二〇年を迎えた。「歌謡曲の父」と呼ばれ、昭和歌謡の礎を築いた。大衆音楽に与えた影響は大きく、その後の作曲家たちが憧れる存在となった。生涯に約五〇〇〇曲を作曲し、その功績を讃えるべく、昭和五十三年（一九七八）八月四日には作曲家として初の国民栄誉賞を受賞した。古賀が生み出す独自の哀愁がある旋律は、「古賀メロディ」と呼ばれて日本人に愛されてきた。

このように古賀および古賀メロディは、昭和歌謡史を検討する上で重要な意味を持っている。しかし、音楽史の場合、その中心は音楽大学に所属する研究者であり、研究および分析対象は芸術的なクラシック音楽に主軸が置かれている。この点は歌謡曲を楽理的な手法で分析した古典的な研究である小泉文夫も指摘する。[1] 実際、彼の研究が世に登場してからも、大衆音楽の作曲家の研究は少ない。

そうした状況下で古賀政男の評伝や、随筆的な小文で彼の足跡の一端を紹介したものが存在する。[2] それらの内容は、古賀メロディの作品を紹介するものと、それが流行した当時の時代背景を説明するもの

といえる。しかし、日本史の歴史研究の専門的な方法論から見ると、古賀の人生および作品に日本近代史の概説書を孫引きしているに過ぎない。古賀が実体験していない出来事や事件を取り上げたところで、それらが彼の作品に繋がっているわけではない。また歌謡史における古賀の功績について、具体的事例を取り上げて分析する点でも不十分である。

そこで本論では、古賀の人生に、彼とは直接的に関係のない事件や世相を重ねるような単純な方法で描くことはせず、従来の古賀に関する書籍や小文類などでは言及されてこなかった歴史的な新事実を掘り下げる。まず、古賀は希代のヒットメーカーと言われるが、その具体的な発売実数は不明であった。この点について、日本コロムビアで所蔵する「レーベルコピー」を使って検討する。また古賀が後の演歌に繋がる要素のある「影を慕ひて」だけではなく、ポップスの要素を持つ「丘を越えて」の流れを作っていることから、「演歌の源流」ではなく「歌謡曲の源流」というべきことを明らかにしたい。

次に古賀自身が黄金時代と自負するテイチクの専属作曲家であった頃の作品を中心に分析し、この頃に「影を慕ひて」と「丘を越えて」との中間的に位置する「緑の地平線」の路線を生み出したことが歌謡曲史上で大きな意味を持つこと、詩吟を入れた舞踊歌謡を生み出し、それが彼の日中戦争下の戦時歌謡と共通すること、デュエットソングやコミックソングのヒットを生み出したことなど、「歌謡曲の源流」というべき多種多様な路線の基礎を築いた点について検討する。

そして、古賀が娯楽の王様であった映画と密着し、映画主題歌や挿入歌を量産することで、ヒット曲の増産に拍車をかけた点を明らかにしたい。映画が流行歌のヒット性に重要な役割を果たしたことは、戦前の映画史研究で言及されてきた[3]。しかし、古賀作品と映画の関係性については検討の余地が残されている。

最後に古賀がカバー曲やリメイク曲作りの天才であることを明らかにしたい。筆者は古賀を「流行歌（歌謡曲）作りの天才」と呼んでいるが、その理由の根幹がカバー曲やリメイク曲にはよく表れている。とくにリメイク曲は、昭和十年代に作ってヒットしなかったオリジナル曲が、四十年が経過してヒットにつながるという前代未聞の成果を生み出している[4]。歌謡曲は、流行歌と呼ばれていたように、時代の流れとともにリズムもテンポも変わるものである。通常ならば三十年も四十年も前の曲を新曲として発売してもヒットする可能性は低い。つまり、リメイク曲の検討は、古賀メロディの色褪せない魅力を明らかにできるのである。

このように本論では、従来の古賀政男研究では見落とされてきた新発見の歴史的事実を考察し、古賀が希代のヒットメーカーであるとともに、「流行歌

（歌謡曲）作りの天才」であり、古賀メロディが多くの人々から絶大に支持されていたことを実証したい。

一　希代のヒットメーカー

古賀政男の作品がレコード化されたのは、昭和五年（一九三〇）二月二十五日にビクターから発売された佐藤千夜子「文のかほり」と「娘ごころ」のカップリングである。続けて十二月二十日に佐藤「影を慕いて」と「日本橋から」が発売されるが、いずれもヒットには至らなかった。ところが、この旋律にライバル会社のコロムビア文芸部長米山正と、文芸部員の伊藤正憲が注目した。両者からの勧誘を受けた古賀は、昭和六年三月にコロムビアに入社する。[5]

古賀はビクターでヒット曲を出せなかったこともあり、専属作曲家になることに躊躇し、作曲を行う社員としての契約を行った。前年十月に専属契約を行っていた古関裕而が月給二〇〇円のところ、古賀は月給一二〇円であった。[6] ところが、古賀の心配は杞憂に終わり、文芸部も驚くほどのヒット曲を連発することになる。昭和六年（一九三一）五月二十日に発売された関種子「乙女心」と、天野喜久代「チャッカリしてるわね」は、一万六六八九枚を売上げた。また売上枚数はわからないが、同年六月二十日発売の藤山一郎「キヤムプ小唄」も「好評で、いい成績を収め、私としては上々の滑り出しであった」という。[7] 一〇万枚には至らなかったものの、ヒットしたことにより、「君は毎日会社に来なくてもいいから作曲に専念してくれ。印税もつけてあげよう」と言われたと回想する。[8] これに安心したわけではなかったが、古賀は昭和六年七月一日にコロムビアと作曲家の専属契約を結んでいる。[9]

そして昭和六年九月二十日発売の淡谷のり子「私此頃憂鬱よ」と藤山一郎「酒は涙か溜息か」は、二三万九三七六枚という驚異的な記録を打ち出した。筆者は戦前のヒット曲を一万枚、大ヒットを一〇万枚と考えている。十一月二十日発売の藤山一郎「丘を越えて」と、淡谷のり子「窓に凭れて」も、一七万枚の大ヒットとなった。そしてビクターではヒットしなかった藤山一郎「影を慕ひて」と関種子「日本橋から」も、翌七年（一九三二）二月二十日に発売すると一〇万七四〇一枚の好成績を収めた。

早くも古賀は書けば当たるヒットメーカーになったのである。古賀の哀愁のあるメロディーがヒットする要因は、日本人が好むヨナ抜き音階による作曲技法が大きい。また当時は、アメリカのウォール街の株式が暴落して世界恐慌が起こり、その影響を受けて日本でも慢性的な昭和恐慌という経済不況であった。「酒は涙か溜息か」や「影を慕ひて」のような現実を直視した哀調を帯びた旋律と、一方で現実を逃避した明るい「丘を越えて」の旋律を生み出

し、ともにヒットさせたことは、それまでの流行歌の作り方を大きく変えることとなる。

多くの人々がどちらの旋律が好むかといえば、圧倒的に短調の暗いメロディーであった。それは当時の古賀メロディのヒット曲のほとんどが短調の暗い作品であることが証明している。ところが、これまでヒット曲の実数を把握することができなかった。日本コロムビアには「レーベルコピー」という貴重な簿冊が保管されており、そこには一部の曲について製造枚数が書かれている。これにより、古賀メロディのヒット曲について明らかにすることができた（表1）。

表1からは、昭和七年二月十七日発売の井上静雄「鳩笛を吹く女の唄」と丸山和歌子「風も吹きよで」の三万七六八三枚から、同八年九月二十日発売の松平晃「はてなき旅」とミス・コロムビア「気まぐれ涙」の三万八四八六枚まで、二万枚以上売れている曲が少なくない。昭和八年（一九三三）三月二十日発売の赤坂小梅「ほんとにそうなら」と中野忠晴「旅がらす」は、一一万五八九二枚の大ヒットとなった。テイチクに移籍する前の製造枚数は、合計一六枚二九曲で九四万九五八五枚である。

例えば、服部良一作曲の霧島昇、ミス・コロムビア「一杯のコーヒーから」（昭和十四年〔一九三九〕三月二十日）が一万二九三五枚、藤山一郎「懐かしのボレロ」が一万五三一一枚である。[10] 両曲は昭和四十年代から五十年代の「懐メロ」番組で取り上げられたヒット曲だが、それでも二万枚に満たない。それらと比較すると、昭和四十年代には右の古賀作品で「ほんとにそうなら」を除くと忘れられてしまったが、「一杯のコーヒーから」や「懐かしのボレロ」よりも売れたヒット曲であった事実を見逃してはならない。

ヒット曲に恵まれなかった古関裕而は、昭和八年の秋頃にコロムビアから来年の専属契約を更新しないという宣告を受けた。この会社の方針に対して古賀は「あすはわが身」と感じ、文芸部長和田竜雄に「芸術家にはスランプはつきものである。とくに作曲を商売にするものには、スランプは周期的に襲ってくる。それを理由に、契約を左右されたのでは、作曲家は全く立つ瀬がない。永久にスランプ状態が続くわけでもないし、一たび調子をとり戻したときには、月給の何千、何万倍もの利益を会社にもたらすのである」と苦言を呈した。[11] 飛ぶ鳥を落とす勢いでヒットを飛ばしていたが、それが止んだときには自分もそうなると感じたのである。そうした理由が存在したにせよ、古賀が古関の契約更新に一役買ったことに違いはない。

タイヘイレコードの作曲家であった服部良一もヒット曲の創作に試行錯誤していた。昭和六年に古賀の「酒は涙か溜息か」が大ヒットすると、翌七年にそれを模倣した黒田進「酒は泪よ溜息よ」を作曲

させられた。服部は古賀メロディに魅力を感じていたが、この体験は屈辱的であったと回想している。[12]

古関は昭和十年（一九三五）六月二十日発売の音丸「船頭可愛いや」が二六万枚の大ヒットとなり、同十二年（一九三七）八月二十六日発売の「露営の歌」が五六万枚の驚異的なヒットによってスランプから抜け出した。日中戦争から太平洋戦争中には、クラシック音楽による格調の高い戦時歌謡で人気となる。

服部はタイヘイからニットレコードを経て、昭和十一年（一九三六）二月にコロムビアの専属となった。そして昭和十二年六月二十日発売の淡谷のり子「別れのブルース」が一三万一三七二枚の大ヒットとなり、古賀とは違ったポップス的な歌謡曲で個性を発揮した。

したがって、古関と服部が頭角を現すまで古賀に対抗できた作曲家は江口夜詩しかいなかった。昭和八年二月にコロムビアの専属作曲家となった江口について、古賀は「私は容易ならぬ強敵の出現に思わず身がまえた」「江口君の出現は、私にはいい刺激となった。それから二人のシーソー・ゲームが始まった」「よき宿敵を得て、私の作曲意欲はますます激しく燃えた」と書き残している。[13]

江口は、昭和八年二月二十日発売の松平晃「かなしき夜」と淡谷のり子「椿姫の唄」の一万八五枚から、同十五年（一九四〇）一月二十日発売の霧島昇、ミス・コロムビア「夕日の戦線」の四一四五枚まで合計九一枚一三四曲で一五八万五九四五枚を売上げている。これに対して古賀は、昭和十四年十二月二十日発売の霧島昇、松原操「新妻模様」と伊藤久男「波を越えて」までを総計すると、二五枚四六曲で二三六万九二七〇枚である。古賀は唯一ライバル視した江口の売上総数を、江口の約三分の一の曲数で七八万枚を凌駕している。いかに古賀の売上枚数が異常であるかが理解できる。

古賀は初期のコロムビア時代に、古賀メロディの大きな二系統を確立させた。一つは「影を慕ひて」から始まり、昭和十二年一月八日発売のディック・ミネ「人生の並木路」、同二十三年（一九四八）九月発売の近江俊郎「湯の町エレジー」、同四十一年（一九六六）六月十日発売の美空ひばり「悲しい酒」へと展開していく路線である。この流れを眺めると、古賀メロディを「演歌の源流」と捉えられるかもしれない。しかし、これは狭義の捉え方であり、もう一つの「丘を越えて」に始まり、昭和八年一月二十日発売の中野忠晴「歓喜の歌」、同十年三月十五日発売の楠木繁夫「ハイキングの唄」、同三十二年四月二十日発売の小坂一也「青春サイクリング」へと展開していく路線を見逃してはならない。[14]こちらは明朗でリズムやテンポが速く、後年の「演歌」とは異なる。

明るくリズミカルな「丘を越えて」を生み出した

ことは、古賀がライバル視した江口夜詩に大きなプレッシャーを与えた。江口は、死去する前日に入院した病院で看護婦から「アレルギーはありまんせか」という質問を受けて「ない」と答えた。その後に息子の浩司を呼び寄せて「俺のアレルギーは古賀政男の「丘を越えて」だ。俺はあれを聴くとジンマシンが起きる」と言い残している。[15]

古賀がセンチメンタルな部分だけではなく、メジャーな楽曲を生み出したことを見逃してはならない。ここが古賀を「演歌の父」ではなく「歌謡曲の父」と呼ぶべきだという大きな点である。

二　テイチクの黄金時代

古賀は昭和九年（一九三四）五月十五日にコロムビアとの契約を打ち切り、テイチクレコードへと移籍する（同年十一月五日にテイチクの取締役に就任）。古賀はコロムビアでヒット曲を出すのが当然という雰囲気に嫌気が差していた。また私生活においても、昭和七年十二月六日に結婚した松竹少女歌劇の夢野里子（中村千代子）との関係が上手くいかず、同八年十月九日には離婚している。[16] こうした状況下でテイチクの社長南口重太郎から懇願され、古賀は心機一転を図る意味でテイチクへの移籍を快諾した。[17] 古賀は昭和十三年（一九三八）十一月十四日にテイチクの取締役を辞任するまで同社に在籍するが、このテイチク専属作曲家時代に古賀の黄金時代と呼ぶべき活躍を見せる。

テイチク黄金時代には、コロムビア時代に生み出した「影を慕ひて」と「丘を越えて」の対照的な系統とは異なる、もう一つの両者の中間的なメロディーラインを作り出すことに成功する。それは移籍第一作である昭和九年七月十五日発売の楠木繁夫「国境を越えて」から始まっている。哀愁がある点では「影を慕ひて」だが、リズムやテンポの速さの点では「丘を越えて」に近い。

この中間的な手法の作品は、昭和十年十月上旬発売の楠木繁夫「緑の地平線」へと繋がり、この作風は古賀メロディ定型ともいうべき一つのジャンルとなる。[18]「緑の地平線」はＢＰＭ一一四という速さである。昭和十四年十一月にコロムビアに戻ってからは、霧島昇「誰か故郷を想わざる」（昭和十五年一月二十日発売）、霧島昇、菊池章子「相呼ぶ歌」（同年七月五日発売）、伊藤久男、菊池章子「馬」（同年十二月中旬発売）、霧島昇「旅役者の唄」（同二十一年〔一九四六〕九月下旬発売）、霧島昇、松原操「三百六十五夜」（同二十三年七月二十日発売）、美空ひばり「青春の恋人たち」（同三十二年〔一九五七〕九月二十日発売）と、中間的な作品は量産されていく。「緑の地平線」は次章で述べる映画主題歌として作られ、戦前の日本レコード大賞に相当するぐらも・くらぶ第一当選歌に輝いた名曲である。[19] しかし、

後年の「懐メロ」番組で歌われる機会も多かったため、多くの昭和歌謡史本で大ヒット曲と言われることが多いが、一〇万枚以上には達していないようである。

この「緑の地平線」の中間的な路線は、次章の映画主題歌で述べる万城目正作曲の「旅の夜風」や「純情二重奏」といった旋律を始め、上原げんと作曲の岡晴夫「国境の春」（昭和十四年二月発売）、江口夜詩作曲の「街の姫百合」（同年四月十日発売）、細川潤一作曲の樋口静雄、横山郁子「涙の責任」（同十五年三月発売）、飯田三郎作曲の岡晴夫「啼くな小鳩よ」（同二十二年〔一九四七〕一月発売）、佐々木俊一作曲の竹山逸郎、藤原亮子「月よりの使者」（同二十四年〔一九四九〕三月発売）、清水保雄作曲の神楽坂浮子「十九の春」（同三十一年〔一九五六〕三月発売）、吉田正作曲の藤本二三代「夢みる乙女」（同三十二年十一月発売）など、多くの作曲家に影響を与えた。この哀愁のある四分の四拍子や四分の二拍子のリズムを古賀が開発した点は、昭和歌謡史において大きな功績と言える。

コロムビアと違ってテイチクには昭和戦前期のレコード発売枚数が書かれた史料が現存しない。そこで参考になるのが、レコード検閲を行っていた内務省警保局が昭和十三年二月までに一〇万枚以上売り上げた作品を記録した史料である。[20] その「売上実数ヨリ見タル流行歌「レコード」ノ変遷」から、テイチク時代の古賀のレコードは、七枚一三曲で総数一三四万六一一二枚が売れたことがわかる。このなかに「緑の地平線」は含まれていない。一〇万枚には届かなかったものの、好成績であったことが予想される。

古賀メロディの中間的な作品としては、昭和十一年六月十五日に発売された藤山一郎「東京ラプソディ」の存在も重要である。これは次章で述べるPCLの同名映画主題歌として作曲された。古賀は中山晋平作曲の「東京行進曲」よりも「モダンな東京を書いてみようと思った」という。そして明治神宮外苑を外国車のフォードに乗っているときに、車窓に流れる風景から旋律が降りてきたと回想する。「東京ラプソディ」は、古賀が「平和への最後の讃歌」と書き残しているように、[21] 戦時色のない時代を象徴する一曲と位置づけられる。

「東京ラプソディ」は、曲調にハバネラを取り入れて、短調から長調へと転調する部分などがあり、「国境を越えて」「緑の地平線」から「誰か故郷を想わざる」へと続いていく作品と少し違うところがある。しかし、フォックス・トロットとパソドブレによって作られた曲のテンポは非常に早く、昭和四十年代から「演歌」の主流のスローテンポではなく、8ビートのアイドルの歌謡曲に見られるハイテンポに共通する。「東京ラプソディ」のBPM一三〇は、キャンディーズやピンク・レディのテンポに相当す

る。両グループが登場する四十年も前に、このテンポの速さを流行歌に取り入れている。ここに古賀メロディが斬新であり、大正時代までの大衆音楽とは違うものであったことがよくあらわれている。

この中間的な哀愁のあるフォックス・トロットの旋律は、小節を入れれば「演歌」よりの歌謡曲になるし、また小節を入れずにアイドルの歌唱法で歌えば「演歌」から離れた歌謡曲になる。この点からも古賀を「演歌の源流」と見るのは狭義の捉え方であり、「歌謡曲の源流」と広義の捉え方をするのが適当である。

テイチク黄金時代の売上枚数で注目すべきは、昭和十一年十二月十七日に発売された杉狂児、美ち奴「うちの女房にゃ髭がある」、美ち奴「あゝそれなのに」のカップリングである。昭和十三年二月までに四九万六九八八枚と驚異的な枚数が売れている。これは古関裕而作曲の「露営の歌」の五六万枚に次ぐ大ヒットである。「うちの女房にゃ髭がある」も次章で述べる日活の同名映画主題歌として作られた。小市民の夫婦生活を微笑ましく作曲したコミックソングである。裏面の「あゝそれなのに」は、ちんどん屋の演奏の定番曲であった「竹に雀」からヒントを得て作曲している。[22]

ここで注目すべきは「うちの女房にゃ髭がある」が明るくコミカルなコミックソングとして作られている点である。同時期には喜劇俳優の榎本健一や古川ロッパなどが流行歌を発売するようになるが、大ヒットしたコミックソングの嚆矢は「うちの女房にゃ髭がある」と言っても過言ではない。古賀は、昭和十二年六月二十七日発売の楠木繁夫「のばせばのびる」、美ち奴「そんなの嫌い」をはじめ、次章で述べる昭和二十年代後半に神楽坂はん子「こんなベッピン見たことない」のシリーズなど、その後も多くのコミックソングを作り続けている。こうした路線が喜劇俳優やコメディアンが歌う歌謡曲の基礎となった点を見逃してはいけない。

デュエットソングは、昭和十年六月に発売された星玲子とディック・ミネ「二人は若い」が二一万一九七二枚という売上げを記録していた。これも日活映画『のぞかれた花嫁』の主題歌として作られた。古賀は男性歌手と女性歌手とが言葉を掛け合う、後のデュエットソングの原型を生み出したのである。次章で述べる映画主題歌では男女の共唱が定番となる。それは一番を男性か女性、二番を女性か男性、三番が共唱というスタイルであり、昭和三十年代からのムード歌謡のような男女が言葉を掛け合うものとは違った。そうしたスタイルを古賀はいち早く実践したのである。

このデュエットソングは、「二人は若い」に続いて前述の「うちの女房にゃ髭がある」が大ヒットしたこともあり、川畑文子、ディック・ミネ「恋は荷物と同じよ」(昭和十年五月十五日発売)、杉狂児、

美ち奴「強くなってね」（同年八月十日発売）、藤山一郎、由利あけみ「茶房の花」（同十三年六月二十五日発売）などが作られている。「二人は若い」の後に、キングで林伊佐緒、新橋みどり「若しも月給が上がったら」（昭和十二年七月発売）など、他社でも男性歌手と女性歌手の掛け合いを取り入れた作品が登場するが、その路線を古賀の大ヒットが導いた点を見逃してはならない。

内務省の記録で目を引くのは、昭和十二年七月に日中戦争が始まってから大ヒットした古賀の戦時歌謡である。昭和十二年九月十五日発売の美ち奴「軍国の母」と楠木繁夫「動員令」は、一一万八九四八枚を売上げている。ここで注目すべきは明朗かつ堂々とした行進曲調の「動員令」ではなく、哀調切々とした「軍国の母」である。

これを作詞した島田磬也は「強い励まし文句の半面、我が子の無事を祈る母の悲願がこめられている歌曲である」と回想している[23]。勇ましく名誉の戦死を願うかのように我が子を見送る母の姿を描く。しかし、古賀がその歌詞につけた悲しい旋律からは、必ず生きて還って来て欲しいと願う母の心情が伝わってくる。内務省の検閲を免れるための建て前の歌詞と、戦争を嫌う人々の本音の旋律とが重なっている[24]。建て前の歌詞に、勇壮で明るい建て前の曲をつけるとヒットしない。そのことをヒット曲である古賀の「軍国の母」は示していた。これに古関の「露営の歌」が五六万枚という空前のヒットになったことも重なり、勇壮さよりも哀調を帯びた戦時歌謡が夥しい数で登場することとなる[25]。

戦時歌謡を検討する上で古賀の「軍国の母」が持つ意味は大きい。しかし、もう一つ見逃してはならないのは、古賀が戦前に「軍国の母」と同形態の楽曲を生み出しており、その手法を「軍国の母」に使っている点である。この手法は昭和十年四月十三日に発売された有島通男「大楠公」に見られる。

昭和十年は、楠木正成没後六〇〇年にあたり、楠木を祀る湊川神社のある兵庫県はもとより、大阪では奉祝イベントが盛大に開かれた。このイベントを盛り上げるPRソングとして作られた[26]。テイチクの社長南口重太郎は、南口と楠公が同じ発音であることもあったが、大の楠木ファンであった。したがって、南口はテイチクのマークに楠木正成の銅像を採用し、古賀とのコンビで大スターとなった黒田進の芸名に楠木繁夫と命名した[27]。

そして、昭和十二年十月十五日には、古賀久子「小楠公」を発売している。息子の楠木正季を題材にした「大楠公」と同形態の曲である。違う点は、曲の途中で詩吟へと移っていくところだろう。楠木正成と正季は、戦前の日本史教科書で南北朝の動乱のときに後醍醐天皇を助けるため戦死を遂げた忠臣として讃えられた。その一番の見せ場が、親子が今生の別れと語り合う「桜井の別れ」の場面である。そう

考えると、「軍国の母」における駅で出征する息子と、見送る母との別れは、「大楠公」と「小楠公」の「桜井の別れ」の再編だったのである。

ヒットしなかった「大楠公」の手法は、「軍国の母」の大ヒットを挟んで、その後の「小楠公」など、古賀メロディの一つの系統となっていく。「小楠公」はレコードのB面であり、このA面になったのは藤山一郎「白虎隊」である。慶応四年（一八六八）の戊辰戦争で新政府軍と戦った会津若松の白虎隊を題材にしていた。二番と三番の間には鈴木吟亮による「南鶴ヶ城を望めば、砲煙あがる」という詩吟が挿入されている。

こうした時代劇を題材に作られた作風は、昭和十二年九月下旬発売の奥田英子「恨みは深し通州城」、同十三年七月五日発売の藤山一郎「血染の戦闘帽」など、日中戦争下の戦時歌謡に転用される。そして、戦後にも昭和三十年（一九五五）一月十五日の神楽坂はん子「雨の田原坂」、同年八月十五日発売の中島孝「霧の川中島」などで再び使われている。「雨の田原坂」は、明治十年（一八七七）の西南戦争における田原坂での西郷軍と政府軍との攻防戦を描いた。二番と三番の間にはん子が詩吟を入れているのは、「白虎隊」と同じである。「霧の川中島」は、戦国時代の武将上杉謙信と武田信玄との川中島の戦いを題材にし、二番と三番の間に「鞭声粛々夜河をわたる」という詩吟を入れている。カバー曲については第四章で述べるが、ヒットしなかった藤山の「白虎隊」を、昭和二十七年（一九五二）六月十五日に霧島昇で発売したところ大ヒットした。「雨の田原坂」や「霧の川中島」は二匹目の泥鰌を狙って作られた。

このように古賀はテイチク時代に「緑の地平線」のような中間的な楽曲と、後年の舞踊歌謡のジャンルに繋がる時代劇および戦時歌謡という新しい系統を生み出した。またデュエットソングという男女が掛け合う方法とコミックソングを実践した。こうした斬新な戦略が、次章で述べる映画と結びついて、希代のヒットメーカーの黄金時代を築くことになったのである。

三　映画と主題歌

戦前の大衆娯楽の王者は映画であった。レコードが一枚一円五〇銭から一円で約三分間の二曲がカップリングされているのに対し、映画は入場料が昭和五年に四〇銭、同八年に五〇銭、同十四年に五五銭、同十七年（一九四二）に八〇銭で上映されていた。[28] 同じ曲をくり返して聴くよりも、長時間の動画を楽しむ方がお得感があった。そして、レコードは一台二〇円から五五〇円する蓄音器を買わない限り聴けなかったが、[29] 映画は入場料だけ支払えば観ることができた。

レコード産業のなかで流行歌の人気が出てくると、映画会社もその存在に注目した。映画と流行歌の関係性は、早くも昭和四年（一九二九）頃のビクターで確認できる。同年六月の佐藤千夜子「東京行進曲」（作曲：中山晋平）は、五月三十一日公開の日活の同名映画に合せて製作された。昭和五年一月の葭町二三吉「祇園小唄」（作曲：佐々紅華）は、二月二十八日公開のマキノ・プロダクション『祇園小唄絵日傘』の映画主題歌となり、同六年四月の徳山璉「侍ニッポン」（作曲：松平信博）は同年四月八日公開の日活の同名映画主題歌となった。どれも映画よりレコードの方がヒットした。

古賀政男も、コロムビア時代に、映画主題歌をいくつも作曲している。昭和六年九月二十日の藤山一郎「酒は涙か溜息か」は、レコードの大ヒットを受けて、松竹映画『想い出多き女』や新興キネマ『酒は涙か溜息か』が作られ、それらの映画主題歌となった。昭和八年七月十日発売の藤本二三吉「東京祭」、松平晃「東京祭」は、同年同月のビクターの小唄勝太郎、三島一声「東京音頭」（作曲：中山晋平）に対抗して作られた。[30]「東京祭」を主催した読売新聞社の宣伝戦略もあって、昭和八年九月二十九日に日活の同名映画が封切られている。[31]そして古賀は「東京祭」の作曲に際して、「流行歌はやさしくて、すぐ唄へると云ふことが必要で、近来は兎角理論を無視した型やぶりのものが多く、だから歌はせられる大衆はむづかしくなるのである」という。[32]

具体的にどのような楽曲が「兎角理論を無視した型やぶりのもの」なのかはわからない。しかし、クラシックの歌曲のような作曲方法であった古関裕而は「やさしくて、すぐ唄へる」という感じではなく、ジャズの要素を生かしきれなかった服部良一の旋律も面白さに欠けた。昭和八年頃には片岡志行、篠原正雄といった作曲家がいたが、古賀メロディに比べると洗練されたものとは言い難い。彼らがヒット曲を得るのに苦労したのに対して、古賀がヒットメーカーとして君臨した差が、右の言説に表れているといえる。

テイチク黄金時代の古賀は、映画と流行歌を従来よりも密接なものとして、自分のヒット曲を打ち出す確率を高めることを考えた。古賀の後輩でテイチク文芸部に入社した茂木大輔は、次のように書き残している。

「古賀の一種、神がかり的な雰囲気のなかで生みだされたのがレコードと映画のタイアップだった。単にレコードのヒット曲にあやかって映画を、映画のなかに主題歌をというだけでなく、企画の段階から手を握って「レコード会社は自社が発売する歌を映画のなかにとり入れてもらい、交換条件として映画の音楽録音をすべて無報酬で手伝う」という方式だった。レコード会社としては、この方式で主題歌を挿入する

だけでなく全編いたるところに主題歌のアレンジを配し、テーマになるメロディをリフレインさせることが出来るので歌の宣伝効果としては抜群であった。映画も歌との相乗効果による宣伝ができてニンマリなわけだ。古賀が発明したこの方式は、やがて〝歌えるスター〟の登場をうながすことになって、レコード歌手と映画スターと二つの人気の肩書きが一つになる、新しいスターを生みだすことにもなったわけだ。古賀がもっていた先見性の功績だろう」[33]。

つまり、従来のように映画に合わせた主題歌や挿入歌を作るだけでなく、台本の読み合わせなどの製作段階から加わって、各場面に使用する音楽すべてを担うのである。テイチク時代の映画主題歌を検討すると、昭和十年五月十五日発売の川畑文子、ディック・ミネ「恋は荷物と同じよ」を主題歌とした『うら街の交響楽』を皮切りに、テイチクは日活映画とタイアップしていることがわかる。古賀の映画主題歌の四七本中、三五本が日活作品である。こうした作品を通して、デュエットソングとして「二人は若い」や「うちの女房にゃ髭がある」、古賀の中間的な作品として「緑の地平線」や「東京ラプソディ」、時代劇から戦時歌謡に転用した「軍国の母」など、その後の彼の作品の系統を生み出すとともに、昭和歌謡史の定石ともいうべき基本形を生み出したことは前述した。

しかし、古賀にとって主題歌と挿入歌だけでなく、劇中の音楽をすべて作曲する作業は楽なものではなかった。古賀はその苦労を次のように書き残している。

「私には大へんな重荷であった。映画音楽の作曲は数がずいぶん多い。封切に間にあわせるため一日に十曲もつくることもあった。もっとも短かいブリッジなども含めてのことだが、登場人物の心理をつたえる音楽もあって、それなりの苦心がいる。ところが、徹夜の録音が終って、やれやれと思ったとたん、技師が録音室から顔を出して、「どうもおかしい、何も入ってないんだ」などといい出すこともあった。不完全な初期のマイクでは、このような馬鹿気た事故も、決して珍らしいことではなかった。これを聞かされると、とたんに徹夜の疲れがどっと出てきて、その場にへたり込んでしまいそうになったものである」[34]。

専属作曲家として月に数曲を書くというノルマでは済まなかった。毎月数本の映画作品の全体に付き合わなければならない。一日に一〇曲を書いたり、徹夜で録音作業を余儀なくされるときもあった。そうした激務にも応えられるほど、古賀は油が乗っていた。

このようなテイチクと映画会社がタイアップして売り出す方法は、どのくらいの効果があったのだろ

うか。映画と主題歌とが共にヒットしたのは、昭和十一年のＰＣＬ同名主題歌『東京ラプソディ』（映画業績順位：第四位、レコード売上枚数：一六万一五五八枚）と、日活『魂』の主題歌「男の純情」（映画業績順位：第一位、レコード売上枚数：一〇万一七四一枚）しかない（表２参照）。

これ以外は古賀の主題歌はヒットしたものの、映画の興行収益としての業績は振るわなかった。結果的にテイチクだけが儲かったことになる。実際、古賀を専属作曲家にしたことにより、それまで三流の国産レコード会社であったテイチクは、外資系のコロムビア、ビクター、ポリドールと肩を並べる大手一流会社へと成長した。

テイチク時代の映画主題歌で看過できないのが、昭和十三年五月二十三日に発売された楠木繁夫「人生劇場」である。これは日活映画『人生劇場（残侠篇）』の主題歌として作られた。尾崎士郎原作の任侠映画だが、やくざ物といってもチャンバラ時代劇ではなく、大正時代を題材にした現代劇であった。古賀は現代任侠映画の主題歌の先駆者と位置付けられる。昭和三十八年（一九六三）三月十六日に鶴田浩二主演の『人生劇場・飛車角』が公開されると、東映は任侠映画を時代劇から現代劇へとシフトしていった。そこでは後述するカバー曲である村田英雄「人生劇場」が主題歌として使われた。この旋律が[35]任侠映画のその後の主題歌の定番となっていく。ここでも古賀は昭和歌謡史に大きな足跡を残しているのである。

ところが、「人生劇場」を書いたあたりから、テイチクの社長南口重太郎と古賀との間で確執が生まれるようになった。会社経営をめぐって南口と古賀とが衝突した。古賀にしてみれば、会社を急成長させた功労者であるにもかかわらず、周囲の社員からの風当たりが強くなったことに我慢ができなかった。[36]

このようにして古賀のテイチク黄金時代は終わりを迎えることとなる。古賀は昭和十三年十一月十四日から十四年十月十日まで外務省の音楽親善大使として、ハワイ、ロサンゼルス、ニューヨーク、ブエノスアイレスなどの視察を終えると、同十四年十一月にコロムビアの専属作曲家へと戻った。当時のコロムビアでは、筆者が「流行歌（歌謡曲）作りの秀才」と名づける作曲家万城目正が活躍していた。テイチクの古賀が日活ならば、コロムビアの万城目は松竹の映画音楽を担っていた。そして、映画と主題歌をともに大ヒットに導いたのも万城目であった。

その歴史的に記念すべき作品が、昭和十三年九月十五日に公開された松竹映画『愛染かつら』の主題歌「旅の夜風」である。これ以降に松竹は歌謡映画に力を入れて、ヒット作を連発していく。この点は主題歌を歌唱した霧島昇が「映画の主題歌っていうのはですね、これまでは、愛染かつらまでは、もう

全然問題にされてなかったんです。売れなかったんです」「各社が今度はその映画の主題歌に力を入れ出したんです。それから映画の主題歌時代っていうことになるんです」と証言している。[37] 昭和十四年度の興行収益のうち、松竹の第一位から三位、五位、七位、九位の映画主題歌がいずれもコロムビアのヒット曲である。[38] そのうち二葉あき子「純情の丘」（同十四年七月十五日発売）、霧島昇、ミス・コロムビア「愛染夜曲」（同十四年五月発売）、霧島昇、高峰三枝子「純情二重奏」（同年八月二十五日発売）、霧島昇、ミス・コロムビア「愛染草紙」（同年十一月発売）と四作品四曲を万城目が作曲している。それらは古賀の「緑の地平線」の中間的な手法の旋律を取り入れてヒットさせた。この点が「流行歌（歌謡曲）作りの秀才」と名づける所以である。

「流行歌（歌謡曲）作りの天才」である古賀は負けなかった。コロムビアへと移籍すると、さっそくヒット曲を連発する。霧島昇、松原操「新妻模様」（昭和十四年十二月二十日発売、同年十二月三十日公開の『新妻問答』の主題歌）は松竹第四位で、五万六一枚、志村道夫、奥山彩子「蛇姫絵巻」（昭和十五年三月二十日発売、同年四月三日公開の『蛇姫様』主題歌）は東宝で前編が第二位、後編が第五位、霧島昇、二葉あき子「新妻鏡」と霧島昇、ミス・コロムビア「目ン無い千鳥」（昭和十五年四月十日発売、五月一日公開の『新妻鏡』主題歌）は東宝で一〇位、霧島昇、菊池章子「相呼ぶ歌」（七月五日発売、七月十三日公開の『愛の暴風』主題歌）は松竹で二位という好成績を収めた。[39] 藤山一郎、二葉あき子「なつかしの歌声」「春よいづこ」（二月十五日発売、二月二十一日公開の『春よいづこ』主題歌）と、伊藤久男「熱砂の誓い」と李香蘭「紅い睡蓮」（十月二十日発売、十二月二十五日公開の『熱砂の誓い』主題歌）は、興業収益の上位外でレコード売上枚数もはっきりしない。

しかし、「新妻模様」と「紅い睡蓮」を除く曲は、昭和四〇年代の「懐メロ」ブームでも歌唱対象曲となっており、[40]「新妻模様」より売れた可能性が高い。その点を考慮して考えると、万城目と同じように映画と主題歌をともにヒットさせることに成功している。実際、昭和十五年度で見ると、万城目は松竹映画『暁に祈る』の主題歌「愛馬花嫁」の一曲しかない。結果的に古賀は万城目を凌駕する成績を残したのである。「流行歌（歌謡曲）作りの天才」は、「流行歌（歌謡曲）作りの秀才」に負けないことを歴史的に証明している。

コロムビアに移ってからの新しい特徴について述べると、「新妻模様」でそれまでになかった明朗なリズミカルな旋律が聴き取れることである。これは中間的な手法でありながら、「緑の地平線」の系統とも、独創的な「東京ラプソディ」とも違っており、「目ン無い千鳥」から島倉千代子「思い出さん今日

は」（昭和三十三年〔一九五八〕三月十五日発売）などへと繋がっていく新しい系統といえる。古賀がアメリカに出発する前になかった点からも、この旋律の系統は約一年間アメリカ大陸で様々な外国音楽に接したことで生まれたものと考えられる。古賀が晩年まで作り続けるこの系統も、「演歌」とは言い難い要素があることを看過してはならない。

古賀の映画作品を考える場合に重要な人物の一人が、映画監督渡辺邦男である。昭和二十一年五月十六日公開の『麗』は歌人の柳原白蓮をモデルにしていたが、この同名主題歌の作曲家に古賀を指名したのも渡辺であった。古賀によれば「渡辺さんは野心を燃しており、是非、私とコンビで行きたい、ということだったのだ。私にとっても戦後の第一作でもあるし、永い間、いろいろ制約を受けて、自由に作曲できなかったので、情熱をかけたつもりであった」と回想する。[41] 昭和二十一年五月発売の霧島昇「麗人の歌」は、戦時中には聴くことのできなかった哀調を帯びた古賀メロディが復活したことを示していた。

そして哀愁のあるフォックス・トロットの旋律も戦時中は息を潜めたものの、終戦後には昭和二十二年九月下旬発売の霧島昇「旅の舞姫」、同二十三年三月中旬発売の霧島昇「紅雀の歌」、七月二十日発売の霧島昇、松原操「三百六十五夜」、同二十四年五月発売の霧島昇「人間模様」など、再び映画主題歌として復活する。また昭和二十三年九月発売の近江俊郎「湯の町エレジー」がヒットしたことで、その続編が映画主題歌となって作られた。昭和二十四年八月十一日発売の近江「湯の町夜曲」、同二十六年（一九五一）一月十五日発売の近江「湯の町物語」は、戦前からの「影を慕ひて」の系譜で作曲されている。一方で、昭和二十三年七月二十日発売の二葉あき子「恋の曼珠沙華」はブルースであり、戦後に外国曲の影響を受けた歌謡曲が溢れるなか、そうした流れに古賀が挑戦していたことがうかがえる。

また昭和二十六年に古賀が見出した芸者歌手の神楽坂はん子がデビューすると、戦前からのコミック的なデュエットソングに新たな手法を生み出した。それが昭和二十八年（一九五三）十月一日発売の神楽坂はん子「こんなベッピン見たことない」である。はん子の歌唱に男性コーラスが合いの手を入れるように掛け合せている。これがヒットしたため、その続編が同名映画主題歌となる。昭和二十九年（一九五四）四月二十日発売の「こんな美男子見たことない」、同年七月十五日発売の「こんなアベック見たことない」、同年九月二十五日発売の「こんな奥様見たことない」である。

昭和三十年代にテレビが普及してくるにつれて、古賀の映画主題歌の数は減少する。だが、昭和三十九年（一九六四）十一月二十日発売の美空ひばり「柔」がＮＴＶテレビの同名主題歌であったように、

映画やテレビとのタイアップはやめなかった。「柔」は昭和四十年（一九六五）の日本レコード大賞の大賞受賞曲に輝いたが、そのヒットの背景にテレビ主題歌として使われたことも影響していたと考えられる。映画からテレビへと大衆娯楽の王座が変わる頃に、古賀は自分の作品がテレビで使われるよりも番組の審査委員長などで出演することの方が多かった。これは昭和四十年代に歌謡曲のリズムが変化し、古賀メロディに代表される戦前からの流行歌の作り方が古く感じられるようになったからである。しかし、そこに至るまでの映画とタイアップしてヒットに繋げる手法は、後輩の作曲家たちのテレビ番組とのタイアップに継続しており、そこに着目した古賀の作曲戦略は先駆的と位置づけられる。

四　カバーとリメイクの天才

古賀政男の研究において、ともすれば看過されてきたのが、カバーとリメイク作品である。昭和歌謡史を振り返ると、売れない歌手が往年のヒット曲をカバーして発売することは少なくない。その意味でヒットメーカーである古賀メロディのカバー曲はたくさん存在する（表3参照）。なぜ、そうしたカバー曲が生まれるのかといえば、古賀が作曲家としてデビューした年のヒットしなかった曲を、その数年後に大ヒットさせることに成功したからであった。

古賀メロディの代表曲の一つといわれる「影を慕ひて」は、古賀が明治大学マンドリン倶楽部に在籍していた時代に作曲された。古賀は昭和四年の同倶楽部の卒業公演で、当時人気絶頂であった佐藤千夜子に独唱を依頼した[42]。「影を慕ひて」は、古賀が子供の頃に聴いた「美しき天然」、佐藤の師である中山晋平が作曲した「船頭小唄」を継承するメロディーラインで作られている。佐藤は「影を慕ひて」を気に入り、ビクターで吹き込むこととなる。「影を慕ひて」は翌五年十二月二十日にビクターから発売された。

佐藤はオペラの声を張り上げて歌うベルカント唱法で「影を慕ひて」を歌唱した。前年から中山作曲の「東京行進曲」は大ヒットしたが、「影を慕ひて」はヒットには至らなかった。しかし、それから一年二か月が経った昭和七年二月二十日にコロムビアから藤山一郎の「影を慕ひて」を発売したところ大ヒットとなった。大きな違いは藤山が声を抑えたクルーナー唱法で歌ったことにある[43]。この点が前年の「酒は涙か溜息か」と同様に、昭和恐慌の不景気な暗い世相に合致して多くの人々からの支持を得られたと考えられる。

古賀はヒットしなかった曲の歌手を替えて、カバー曲として再発売することで大ヒットさせることに成功した。他の作曲家の作品はヒットしないと、レコード会社も諦めてしまう。しかし、古賀の作品

は「影を慕ひて」が証明したように、一度埋もれてもカバー曲にすれば売れる見込みがあった。古賀の自信と実績、それらを理解するレコード会社の販売戦略とが重なったことで、古賀のカバー作品は可能になったと思われる。

テイチクでは、コロムビアでヒットした藤山一郎の「影を慕ひて」や「スキーの唄」を、楠木繁夫にカバーさせている。だが、オリジナルのヒット曲に勝るものはなく、楠木のカバー曲はヒットしなかった。カバー曲のヒットには、オリジナルがヒットしていない場合と、オジリナルのヒット曲が発売されてから一定の時間が経つことが必要であった。そのことを古賀が悟ったと見えて、その後しばらくカバー曲を出していない。

再びカバー曲に力を入れるのは、昭和二十年代になってからである。昭和二十四年十一月一日発売の近江俊郎「月夜船」は、同十九年（一九四四）七月上旬に沖縄出身の波平暁男で発売されたものがオリジナルである。太平洋戦争中に国民を少しでも明るくさせようとする作曲者の意欲が感じられる。しかし、戦局が悪化した時期であったため、レコードがヒットするはずがなかった。古賀は戦争によって埋もれてしまった「月夜船」のカバーを近江に託した。この選択は功を奏し、「月夜船」は近江のヒット曲の一つとなった。

「月夜船」に光が当たっていた頃、古賀はラジオから流れる福岡県の民謡「炭坑節」を聴きながら、新しい「炭坑節」を作ろうと閃いた。そして完成した「トンコ節」は、昭和二十四年一月十日に楠木繁夫と久保幸江の共唱で発売されたが、期待通りの成果には至らなかった。それから二年が経って、朝鮮戦争の影響で特需景気を迎えると、手拍子を添えて歌うお座敷ソングが歓迎されるようになった。そこで古賀は「トンコ節」のカバーを考え、西條八十が歌詞を書き直した。楠木が古巣のテイチクへと移籍していたため、久保と新人の民謡歌手加藤雅夫とが録音した。昭和二十六年二月十五日に発売された「トンコ節」は、関西方面の飲み屋街から火がついて、燎原の火の如く全国的な大ヒットとなった。

古賀は、二度あることは三度あると感じたのだろう。昭和二十七年六月十五日に霧島昇「白虎隊」、同年十月十日に古賀政男「人生の並木路」、藤山一郎「東京ラプソディ」、安藤まり子「月の浜辺」、神楽坂はん子「あゝそれなのに」、青木光一「サーカスの唄」、同二十八年三月十五日に古賀政男「男の純情」、奈良光枝「夕べ仄かに」、青木光一「緑の地平線」、久保幸江・加藤雅夫「二人は若い」、藤山一郎「青い背広で」、霧島昇「白椿の歌」（楠木繁夫「白い椿の唄」）と、戦前のヒット曲をカバーさせている。

このうち、霧島昇「白虎隊」は、戦前の藤山一郎のオリジナルを上回るヒットとなった。さらに昭和二十九年九月二十五日に高倉敏、久保幸江「うちの

女房にゃ髭がある」、同年十二月十日に神楽坂はん子、青木光一、中島孝「三日吉三」、霧島昇・久保幸江・高倉敏・岡本敦郎・若山彰「白浪五人男」、同三十一年四月に中島孝「人生劇場」、島倉千代子「日本橋から」、青木光一「東京娘」、湯川きよ美「美わしの宵」、奈良光枝「嘆きの夜曲」、鳴海日出夫「青春日記」と、戦前のカバー曲が続けて発売されている。そして昭和三十四年四月四日発売の村田英雄「人生劇場」がヒットすると、これを機会にレコード各社でリバイバルブームが起こることとなる。

リバイバルブームのなか、古賀は昭和三十五年（一九六〇）六月十五日に北見沢惇「悲しい酒」という新曲を発売した。これは昭和六年の藤山一郎「酒は涙か溜息か」をカバー曲にするのではなく、新しい「酒は涙か溜息か」を生み出すことを企画した。作詞家の石本美由起は「酒は涙か溜息か」のような二行詩をいくつも書くのに苦心したと回想する[44]。だが、歌詞を見た古賀は、二行詩で作曲するのが難しいと感じ、二行詩を二つ繋げて四行詩にして曲をつけた。そのため、仕上がりは「酒は涙か溜息か」ではなく「影を慕ひて」を進化させた感じである。しかし、「悲しい酒」はヒットしなかった。これで諦めないのが古賀である。六年が経った昭和四十一年六月十日に美空ひばりで再発売した。さらに昭和四十二年（一九六七）三月十日にはひばりが間奏部分に台詞を入れて、前よりも長尺の演奏へと作り替えた。そうした結果、「悲しい酒」は、一四五万枚を売上げるひばりの代表曲の一つとなった[45]。カバー曲の可能性にかけた古賀の粘り勝ちである。

リバイバルブームで最大のヒットとなったのは、昭和三十六年（一九六一）八月にビクターで発売されたフランク永井「君恋し」である。古賀が中心となって昭和三十四年（一九五九）に日本レコード大賞が制定されたが、「君恋し」は同三十六年の大賞曲に輝いた。佐々紅華が作曲した「君恋し」は、大正十五年（一九二六）十月に高井ルビーで発売し、昭和四年六月に二村定一で再発売されてヒットした。ただし、前者は佐々が作詞し、後者は時雨音羽が作詞しており、歌詞の内容が違う。それを昭和三十六年に寺岡真三がロッカバラードにアレンジした。一見すると、カバー曲の手法でヒットに繋げた法則を発見したのは佐々のように思える。しかし、歌詞が変わっている点ではリメイクであり、タイトルとサビの歌詞「君恋し」が変わっていない点ではカバーであって、どちらとも言えない存在である。また昭和三十年代のカバー曲によるリバイバルブームも、「君恋し」はそれに乗ってビクターが発売したものであり、ブームを生み出したわけではない。

カバー曲の役割をデビュー当時から発見し、その積み重ねでリバイバルブームを作ったのは古賀である。その延長線上に昭和四十年代の「懐メロ」ブームがあるわけだから、そのブームの下地も古賀が形

成したと言っても過言ではない。このように考えると、古賀は単に歌謡曲の源流を生み出した存在としての「歌謡曲の父」ではなく、もっと大きな歌謡曲の水脈を作り出した「歌謡曲の父」と位置付けることができるのである。

さて、筆者は古賀を「歌謡曲の父」に加えて、「流行歌（歌謡曲）作りの天才」と呼んでいる。古賀のリメイク作品には「流行歌（歌謡曲）作りの天才」であることがよくあらわれている。古賀はヒットしなかった曲のタイトルと歌詞を変えて、再発売することを試みた。筆者が確認したところ、三十八曲をリメイクしている（表4参照）。これほどリメイクをくりかえす作曲家は珍しい。

古賀のリメイクは、作曲家デビューとなったビクターで昭和五年二月二十五日に発売された佐藤千夜子「文のかほり」と「娘心も」から始まっている。「文のかほり」は昭和八年三月十五日にコロムビアから発売された淡谷のり子「来る来るサーカス」となり、「娘心も」は昭和七年五月二十日発売の丸山和歌子「月夜の恋」として生まれ変わった。

次に作られた昭和五年十一月二十五日発売の佐藤千夜子「青い鳥」は、昭和七年七月二十日発売の関種子「笛は冴ゆれど」、同二十九年七月十日発売の京町香江「青い小鳥は何処へ行く」と、二度リメイクされている。京町は古賀の門下生としてデビューしたが、デビュー曲の「港の混血娘」（昭和二十八年八月十五日発売）は、渡辺はま子「りぼんむすめ」（昭和十五年五月二十日発売）のリメイクであった。「りぼんむすめ」は日中戦争が長期化するなか一万五九七四枚という及第点であったが、古賀としてはもっとヒットする作品だと考えていたのかもしれない。

このように再挑戦したものの、満足のいかない結果に終わった作品もあった。一方でリメイクが功を奏して大ヒットした作品も存在する。昭和十三年八月一日発売の岡蘭子「合歓の木蔭」は、日活映画『楽天公子』の主題歌として作られた。岡蘭子は、テイチクの朝鮮支社のＯＫレコードレーベルで活躍した李蘭影の日本人歌手名である。これを古賀はテイチクからコロムビアへ戻ると、霧島昇と二葉あき子がデュエットする「新妻鏡」に作り替えて、昭和十五年四月十日に発売した。「新妻鏡」は東宝の同名映画主題歌として映画とともにヒットした。同じ曲であっても二年というタイミングの差で世の中に残るか、消えるかという差が生まれた。古賀がカバーと同じようにリメイクに力を入れた背景には、この「合歓の木陰」から「新妻鏡」への変化が大きかったと考えられる。

古賀はテイチク黄金時代にヒット曲に恵まれ過ぎたため、その影に隠れてしまう佳曲が少なくなかった。古賀はそうした佳曲を戦後にコロムビアでリメイクし続けた。その象徴的なのが、テイチクの芸者

歌手美ち奴の作品である。昭和十年十二月二十六日発売の「二人きりなら」が同二十八年六月十五日発売の神楽坂はん子「見ないで頂戴お月様」、同十一年十二月二十五日発売の「櫛巻くずし」が同三十一年一月十日発売の美空ひばり「怒涛の男」、同十三年二月十日発売の「椿島田」が同二十九年五月十五日発売の神楽坂はん子「湯の町椿」として生まれ変わり、それぞれヒットした。はん子は、古賀が見出した神楽坂の芸者で、彼女の作品のほとんどが古賀メロディである。同じ芸者出身ということもあり、美ち奴の声質に合致していたといえる。

そうした意味で次の二曲も考えることができる。昭和十二年八月十日発売の杉狂児と美ち奴「強くなってね」は、「うちの女房にゃ髭がある」の二匹目の泥鰌ともいえる作品であったが、ヒットしなかった。これを古賀は、昭和二十八年六月十日に神楽坂はん子と青木光一で「モチのロン」として再発売した。改題名は「強くなってね」のサビの掛け合いの「モチのロン」を生かしている。さらに昭和四十五年（一九七〇）十二月二十五日発売の神楽坂はん子のステレオLP盤「お久しぶりですはん子です」では、古賀がはん子とデュエットで「モチのロン」を収録している。この曲を好んでいたことと、ヒット曲として自信があったことがうかがえる。

神楽坂はん子は昭和三十年に歌手を引退するが、それと替わるように同年にデビューしたのが島倉千代子である。彼女はコロムビアで美空ひばりに次いで期待の星となった。昭和三十年九月五日発売の島倉千代子「りんどう峠」は、昭和七年七月一日発売の中野忠晴「高原の唄」のリメイクであった。「高原の唄」は前奏や間奏部分に鳥の鳴き声を入れた斬新な作風であったが、「りんどう峠」では鈴の音に変わり、歌唱の最後の部分に「ハーイのハイのハイ」という掛け声を入れて、当時流行り出した望郷歌謡の牧歌的な要素を強調している。

古賀の愛弟子である大川栄策は、昭和四十四年（一九六九）六月十五日発売の「目ン無い千鳥」のカバーでヒットしたものの、オリジナル曲では当たることがなかった。古賀は何とかヒット曲を与えたいと思っていた。そうした作品のなかにはリメイクの佳曲も含まれていた。昭和四十四年七月十五日発売の「筑後川エレジー」は、同二十四年十一月一日発売の近江俊郎「たそがれの湖」、同五十年（一九七五）五月一日発売の「酒場えれじい」は、同三十年三月十五日発売の永田とよこ、中島孝「旅の兄妹流し」のリメイクである。どちらも哀調を帯びた古賀メロディの決定版といえるような旋律だが、思い通りの結果には至らなかった。

同じような旋律でも五木ひろし「浜昼顔」は大ヒットした。この楽曲は誕生から約四十年という歳月を費やしており、古賀のリメイクにかける執念の強さを表している。昭和十一年七月七日発売の藤山

一郎「さらば青春」は、テイチク黄金時代の作品だが、「東京ラプソディ」の影に隠れてしまった。そこで昭和三十年十二月十日に青木光一「都に花の散る夜は」としてリメイクしたが、これでも光は当たらなかった。そして昭和四十九年（一九七四）六月十八日に五木ひろし「浜昼顔」としてリメイクした。「浜昼顔」は三九万四五〇枚という大ヒットとなり、同年の『第二五回ＮＨＫ紅白歌合戦』の五木の出場曲に選ばれた。

古賀が売れなかった作品に対する愛情は、昭和四十七年（一九七二）十一月十日に発売した作曲家生活四十五周年のＬＰ盤に注がれる。このＬＰでは、昭和十二年八月上旬発売の藤山一郎「忠烈大和魂」が大川栄策「青春よ永遠に」、同十六年（一九四一）十月二十日発売の李香蘭「北京の子守唄」と同二十九年十月二十日発売の織井茂子「渚の子守唄」が森繁久彌「友あればこそ」、同四十三年（一九六八）五月一日発売の茜なゝこ「青春劇場」が美空ひばり「もしもこの夜がお芝居ならば」とリメイクされた。また、収録曲のちあきなおみ「彼のお気に入り」は、同二十六年三月十五日発売の藤山一郎「愛のカレンダー」と同三十九年八月二十日発売の北原謙二「胸のカレンダー」を経て三度目の正直を願ってリメイクされたものであった。

この作成に当たり古賀は、コロムビアの作曲家森一也に「ＬＰのタイトルは『青春よ永遠に』としようと思っている。で、このタイトルに似合う曲を旧作から選んでテーマ・ソングにしたいのだが、世間からすっかり忘れられてしまっている僕のメロディでタイトルに相応しい曲と言うと何だろうね」と質問した。森が前述した藤山一郎「忠烈大和魂」を歌うと、古賀は「ああこれは『忠烈大和魂』だね。三十年も前の唄を覚えていてくれて有難う」と答えた。[46]

こうしたリメイクに関して古賀は、「僕の作った曲は自分の子供のように可愛いい。それだけにせっかく生まれた子が世の中へ出ても認められずに埋もれてしまうと大変に淋しい。だから、いつかチャンスがあったらもう一度その曲を世の中へ送り出したいと思う。それほどにしても駄目なら運の悪い子だったとあきらめるしかないが親の目から見ると出来の良くない児ほど可愛いいものでね」と語っている。[47]

古賀は、とにかく自分の過去の作品を忘れることなく覚えている。そして売れなかった「出来の良くない児」が「運の悪い子」にならないようにリメイクした。この作曲家意識は、「忘却こそ創作の泉」だと公言する古関裕而とは正反対である。[48] 古賀は自分の佳曲が売れなかったのは、他の大ヒット曲の間に挟まってしまうなどの売り出したタイミングの悪さ、大衆に広がらなかった宣伝の悪さ、など色々なことを想起したに違いない。古賀のリメイクには

ヒットメーカーであるという自信が表れていた。

古賀メロディで一般発売された最後のシングル盤は、昭和五十二年（一九七七）七月一日の島倉千代子「ひろしまの母」であり、同年六月十日の第四回広島平和音楽祭で発表された。太平洋戦争によって失った子供を想う母の心情を歌っている。しかし、これも昭和十一年一月十日発売の木村肇「風に吹かれて」というテイチク黄金時代に書いたリメイク作品であった。従来の古賀の評伝などでは一切触れられていないが、古賀メロディはリメイクに始まり、リメイクで終わっているのである。そこには時代は変わっても、自分の作品の魅力は不変だという、「流行歌（作曲家）作りの天才」の思いが表れているといえる。

おわりに

古賀政男は演歌の源流ではなく、流行歌（歌謡曲）の源流であることを検討した。古賀は後の演歌に結びつく昭和五年の「影を慕ひて」を生み出したが、一方で後のポップスに結びつく同六年の「丘を越えて」も作曲していた。そして両曲の中間的な路線である昭和十年の「緑の地平線」を作り出した点を見逃してはならない。この三つの大河は、その後の昭和歌謡史に大きな流れとなっている。また男性歌手と女性歌手が掛け合う昭和十年の「二人は若い」などデュエットソングや、それを作る際に用いた同十一年の「うちの女房にゃ髭がある」のようなコミカルなコミックソングで大ヒット曲を生み出した。さらに昭和十年の「大楠公」や同十二年の「白虎隊」など、後に歌に合せて舞踊を取り入れた舞踊歌謡の基礎を作るなど、歌謡曲の新たなジャンルに挑戦した。こうした点から古賀を演歌の源流と捉えるのは微視的であり、流行歌（歌謡曲）の源流と巨視的な視点から捉える必要がある。

古賀は希代のヒットメーカーとして見られてきた。しかし、その製造枚数などを明示した研究はなかった。本稿では日本コロムビアに現存する秘蔵史料である「レコードレーベルコピー」に記入された情報から明らかにできた。この実数を見ると、当時の作曲家の中でも売れていたことがわかる。ライバルである江口夜詩はヒット曲が少なくなり、昭和十五年にはポリドールへ移籍している。江口に替わってそれまでヒットに恵まれなかった古関裕而と服部良一が台頭してくる。こうしたヒットメーカーの立場に変化が生じても、古賀がスランプに陥ることはなかった。

むしろ古賀は昭和十年代に作曲家人生として黄金時代を迎える。その背景には彼が積極的に楽曲を提供した映画との関係が大きかった。古賀は大衆娯楽の王様である映画と、流行歌を結び付けて、ヒットさせることを考えた。昭和十一年の『東京ラプソ

ディ』と「東京ラプソディ」「東京娘」、『魂』と「男の純情」「愛の小窓」は、映画と主題歌がともにヒットしたものの、それらを除くと両方ともがヒットすることは難しかった。それを連続的に成し遂げたのは、作曲家万城目正であった。彼が作曲した昭和十三年の『愛染かつら』の主題歌「旅の夜風」から、映画と主題歌がともにヒットするようになる。古賀はこの流れに乗って昭和十五年の『春よいづこ』『新妻鏡』『蛇姫様』によって映画と主題歌をともにヒットさせている。万城目に引けを取らない活躍ぶりを見せた。

こうした黄金時代には自身の作品があまりにもヒットしたことにより、その曲の影に隠れてヒットしなかった曲も出てきた。古賀は気に入った作品でヒットしなかったものを、カバーやリメイクという手段で再発売した。カバー曲の最初は昭和五年の「日本橋から」と「影を慕ひて」、リメイク曲も同年の「文のかほり」と「娘ごころ」から始まっている。このうち昭和七年に「影を慕ひて」がヒットしたため、古賀はカバーやリメイクに手ごたえを感じたと思われる。リメイクでも昭和十五年の「新妻鏡」や同四十九年の「浜昼顔」などのヒットが生まれている。ヒット曲をカバーすることはあっても、ヒットしなかった曲をカバーやリメイクで売り出そうという手段は珍しい。このカバーやリメイクの流れを昭和歌謡史で作り出したのも古賀であったと言っても過言ではない。

註

(1) 小泉文夫『歌謡曲の構造』冬樹社、一九八四年。

(2) 田辺明雄「古賀政男論」(『季刊芸術』一二―四、一九七八年一〇月)、石出法太「古賀政男―「古賀メロディー」と民衆」(『歴史地理教育』五七六、一九九八年三月)、菊池清麿「近代日本と古賀メロディーの心情」(『メディア史研究』一六、二〇〇四年四月)、同上『評伝古賀政男―青春よ永遠に―』アテネ書房、二〇〇四年七月、漆山賢明「古賀政男我が心の歌―メロディーで綴るその音楽人生―」(『温故叢誌』二〇一五年十一月)。

(3) 古川隆久「流行歌と映画」(戸ノ下達也・長木誠司編『総力戦と音楽文化』青弓社、二〇〇八年)。

(4) 古賀政男のカバーやリメイク作品については、『オリジナル版　古賀政男大全集』(コロムビア・ファミリー・クラブ、一九八八年)、『影を慕いて　古賀政男大全集』(日本コロムビア株式会社、一九九〇年)、『古賀メロディ誕生七〇年記念　古賀政男大全集―二十世紀の遺産―』(日本コロムビア株式会社、一九九八年)、『古賀政男　黄金時代の集大成―SP盤復刻―』(株式会社テイチクエンタテインメント、二〇〇四年)の別冊解説書で、個別解説で触れている曲がある。それらにないものも含めてまとめた解説は、筆者が監修・解説・選曲を行った『古賀政男リメイク作品集』(日本コロムビア株式会社、二〇二四年)だけである。だが、本稿では『古賀政男リメイク作品集』に含ま

れなかった現状で確認できる全リメイク作品を取り上げている。またカバー曲のシングル盤についてまとめて分析したものは、これまでになかった。

(5) 古賀政男『我が心の歌』展望社、一九六五年、一一一頁。

(6) 古関裕而、藤山一郎「放送音楽よもやま」(『放送文化』一九六五年十一月)、同右、一一一頁〜一一二頁。

(7) 同右、一一四頁。

(8) 古賀政男『歌はわが友わが心』潮出版社、一九七七年、一一〇頁。

(9) 古賀メロディ誕生七〇年記念『古賀政男大全集—二十世紀の遺産—』日本コロムビア株式会社、一九九八年、一〇七頁。

(10) 「レコードレーベルコピー」日本コロムビア株式会社所蔵。

(11) 前掲『我が心の歌』一二九頁。

(12) 服部良一『ぼくの音楽人生』日本文芸社、一九九三年、八四〜八五頁、

(13) 『コロムビアニュース』第四巻第二号、一九三三年二月、古賀政男『歌はわが友わが心』潮出版社、一九七七年、一一〇頁。

(14) この点については、シンガーソングライターの大瀧詠一も指摘している(『大瀧詠一の日本ポップス伝—第三夜『古賀政男研究』—』NHK−FM、一九九五年八月九日放送)。

(15) 江口浩司「私と父」(『日本音楽著作家組合会報』一〇四、一九七九年三月)、江口直哉『江口夜詩—昭和歌謡の礎を築いた作曲人生—』つむぎ書房、二〇二三年、二一七頁〜二一八頁。

(16) 前掲『古賀メロディ誕生七〇年記念　古賀政男大全集』二二一〜二二三頁の年譜参照。

(17) 前掲『我が心の歌』一四〇〜一四二頁。

(18) 古賀作品の中間的な存在については、シンガーソングライターの大瀧詠一も重視している(前掲『大瀧詠一の日本ポップス伝—第三夜『古賀政男研究』—』)。

(19) 「緑の地平線」歌詞カード(筆者所蔵)、福田俊二編『懐かしの流行歌集・戦前戦中Ⅰ』柘植書房、一九九五年、四六〇頁。

(20) 「売上実数ヨリ見タル流行歌「レコード」ノ変遷」(『SPレコード』三五、一九九九年一二月)。

(21) 前掲『我が心の歌』一四九頁〜一五一頁。

(22) 前掲『古賀政男　黄金時代の集大成—SP盤復刻—』二〇二頁〜二〇三頁。

(23) 島田磬也『裏町人生』創林社、一九七八年、二〇二頁。

(24) 拙稿「戦時下の安らぎと慰め」(『東京新聞』二〇二三年八月十四日)、拙著『昭和歌謡史』中公新書、二〇二四年、参照。

(25) 拙著『古関裕而』中公新書、二〇一九年、拙稿「古関裕而の短調と長調の戦時歌謡」(『月刊WiLL』二〇二五年九月号)参照。

(26) 森正人「一九三五年の楠木正成をめぐるいくつかの出来事—ナショナル・ローカル・資本—」(『人文論叢　三重大学人文学部文化学科研究紀要』二五、二〇〇八年三月)参照。

(27) 『特別展　昭和歌謡は杉並から生まれた　テイチク東京吹込所物語』杉並区立郷土博物館、二〇二五年、参照)。

(28) 週刊朝日編『値段の明治大正昭和風俗史』朝日新聞社、一九八一年、一六五頁。

(29)『日蓄ニューズ』第一巻第一号、一九三〇年四月～『コロムビア・ニュース』第七巻第四号、一九三六年九月の広告。

(30) 拙稿「東京音頭の創出と影響―音頭のメディア効果―」（『商学研究』三一、二〇一五年三月）参照。

(31)『読売新聞』一九三三年八月十九日、夕刊、九月二十七日、夕刊。

(32) 同右、一九三三年七月六日、朝刊。

(33) 茂木大輔『誰か故郷を・・・・素顔の古賀政男』講談社、一九七九年、一五三頁。

(34) 前掲『我が心の歌』一四七頁。

(35) 拙著『昭和歌謡史』中公新書、二〇二四年、二六九～二七三頁参照。

(36) 前掲『我が心の歌』一五五～一五六頁。

(37) 霧島昇と杉浦幸雄の対談（『花も嵐もふみ越えて』日本コロムビア、一九七九年、収録）。

(38) 水町青磁「邦画界」（『キネマ旬報』七〇二号、一九四〇年一月）。

(39) 水町青磁「昭和十五年度各社業績検討」（『映画旬報』一九四一年一月二十一日号）。

(40)「新妻模様」と「紅い睡蓮」は、昭和四十三年四月から四十九年三月まで東京12チャンネル（現・テレビ東京）で放送された『なつかしの歌声』でも対象にならなかった。両曲は、永来重明著、三枝孝栄編『なつかしの歌声』（日本音楽出版、一九七一年改訂版）に掲載されているため、「新妻模様」は「旅の夜風」や「純情二重奏」の影に隠れてしまったことと、「紅い睡蓮」は戦後に李香蘭（山口淑子）が歌唱しなかったことが大きいと思われる。『なつかしの歌声』については、拙稿「東京12チャンネル『なつかしの歌声』の魅力―『昭和歌謡史』（中公新書）に寄せて―」（『砧通信』五四、二〇二五年十二月）を参照されたい。

(41) 前掲『我が心の歌』一九四頁。

(42) 前掲『我が心の歌』一〇六頁。

(43) 前掲『歌はわが友わが心』一一二頁。

(44) 石本美由起「音楽と人生」（『久留米大学法学』一五、一九九二年一二月）。

(45)「あのころ番付ひばり『柔』は一九〇万枚」（『日経プラスワン』二〇〇〇年六月二十四日）。

(46)～(47)『オリジナル版古賀政男大全集』一九八八年、一三頁。

(48)『読売新聞』一九七八年十月十八日、夕刊。

〔付記〕

本稿の執筆にあたっては、筆者が監修・選曲・解説を行った『古賀政男リメイク作品集』のCD制作で拝見した日本コロムビア株式会社で所蔵する「レコードレーベルコピー」、筆者が監修を行った杉並区立郷土博物館で開催された「昭和歌謡は杉並から生まれた　テイチク東京吹込所物語」（二〇二五年十月二十五日～十二月七日）に際して拝見したテイチクエンターテインメントで所蔵する「吹込報告書」を、使用させていただいた。どちらも一般公開されていない貴重な史料である。日本コロムビア株式会社の衛藤邦夫氏、斉藤徹氏、冬木真吾氏、テイチクエンターテインメントの倉橋賢治氏、檜山直樹氏には、この場をかりて御礼申し上げる。

Abstract

This paper examines how the composer Koga Masao laid the foundation for a wide variety of genres that could be called the “origin of Japan popular music.” It also how Koga’s mass production of film theme songs and insert songs accelerated the production of hit songs and express how, he, unlike other composers, focused on cover songs and remakes. Finally, this paper reveals newly discovered historical facts that have been overlooked in previous studies of Koga Masao.

表１　古賀政男作品の発売枚数一覧

レコード番号	曲　名	録音年月日	発売年月日	作詞家	歌手名	発売枚数
26275-A	乙女心	昭和６年３月25日	昭和６年５月20日	鹿山鶯村	関種子	16,686枚
26276-B	チャッカリしてるわね	昭和６年３月25日		西岡水朗	天野喜久代	
26325-A	キヤムプ小唄	昭和６年４月上旬	昭和６年６月20日	島田芳文	藤山一郎	〔2000枚〕
26326-B	月の浜辺	昭和６年４月上旬		島田芳文	河原喜久恵	
26373-A	博多小夜曲	昭和６年４月27日	昭和６年７月20日	西岡水朗	関種子	〔1300枚〕
26373-B	博多小夜曲	昭和６年４月下旬		西岡水朗	朝居丸子	
26486-A	酒は涙か溜息か	昭和６年８月下旬	昭和６年９月20日	高橋掬太郎	藤山一郎	239,376枚
26486-B	私此頃憂鬱よ	昭和６年７月20日		高橋掬太郎	淡谷のり子	
26530-B	「青春図界の唄（貞子の唄）	昭和６年７月30日	昭和６年８月５日	菊池寛	関種子	〔1500枚〕
26624-A	丘を越えて	昭和６年10月12日	昭和６年11月20日	島田芳文	藤山一郎	(170,000枚)
26624-B	窓に凭れて	昭和６年10月12日		島田芳文	淡谷のり子	
26819-A	鳩笛を吹く女の唄	昭和７年２月８日	昭和７年２月17日	佐藤惣之助	井上静雄	37,683枚
26819-B	風も吹きよで	昭和７年２月８日		西岡水朗	丸山和歌子	
26748-A	日本橋から	昭和７年１月15日	昭和７年２月20日	浜田廣介	関種子	107,401枚
26748-B	影を慕ひて	昭和７年１月15日		古賀政男	藤山一郎	
26828-A	あけみの歌	昭和７年２月15日	昭和７年３月20日	原阿佐緒	関種子	23,162枚
26828-B	佳人よ何処へ	昭和７年３月２日		原阿佐緒	淡谷のり子	
26830-B	肉弾三勇士の歌	昭和７年３月17日	昭和７年３月25日	渡部栄伍	江文也	46,964枚
26875-A	夜霧の港	昭和７年４月14日	昭和７年４月25日	時雨音羽	中野忠晴	50,846枚
26875-B	さらば上海	昭和７年４月14日		時雨音羽	丸山和歌子	
27221-A	恋ごころ	昭和７年11月18日	昭和７年12月15日	西條八十	長谷川一郎	44,883枚
27221-B	去りゆく影	昭和７年11月28日		西條八十	関種子	
27245-A	歓喜の歌	昭和７年12月19日	昭和８年１月20日	西岡水朗	中野忠晴	43,895枚
27245-B	春ぢゃもの	昭和７年12月１日		西岡水朗	丸山和歌子	
27359-A	「お蝶夫人」の唄	昭和８年３月７日	昭和８年３月20日	西條八十	ミス・コロムビア	9,511枚
27404-A	ほんとにそうなら	昭和８年３月14日	昭和８年５月20日	久保田宵二	赤坂小梅	115,892枚
27404-B	旅がらす	昭和８年２月27日		久保田宵二	中野忠晴	
27446-A	はてなき旅	昭和８年６月９日	昭和８年９月20日	西條八十	松平晃	38,486枚
27446-B	気まぐれ涙	昭和８年６月９日		西條八十	ミス・コロムビア	
50055B	二人は若い	昭和10年６月22日	昭和10年６月末	玉川映二	星玲子、ディック・ミネ	(211,972枚)
50338A	東京ラプソディ	昭和11年５月31日	昭和11月６月15日	門田ゆたか	藤山一郎	(161,558枚)
50338B	東京娘	昭和11年５月31日		佐藤惣之助	藤山一郎	
50490A	男の純情	昭和11年８月６日	昭和11年８月25日	佐藤惣之助	藤山一郎	(101,741枚)
50490B	愛の小窓	昭和11年８月７日		佐藤惣之助	ディック・ミネ	
50581A	女の階級	昭和11年９月30日	昭和11年10月20日	村瀬まゆみ	楠木繁夫	(120,467枚)
50581B	回想譜	昭和11年10月３日		今城靖児	藤山一郎	

レコード番号	曲　名	録音年月日	発売年月日	作詞家	歌手名	発売枚数
1165A	うちの女房にゃ髭がある	昭和 11 年 12 月 4 日	昭和 11 年 12 月 17 日	星野貞志	杉狂児、美ち奴	(496,988 枚)
1165B	あゝそれなのに	昭和 11 年 12 月 4 日		星野貞志	美ち奴	
1280A	青い背広で	昭和 12 年 1 月 30 日	昭和 12 年 2 月 10 日	佐藤惣之助	藤山一郎	(134,438 枚)
1280B	青春日記	昭和 12 年 1 月 30 日		佐藤惣之助	藤山一郎	
1780A	軍国の母	昭和 12 年 8 月 7 日	昭和 12 年 9 月 15 日	島田磬也	美ち奴	(118,948 枚)
1780B	動員令	昭和 12 年 7 月 20 日		島田磬也	楠木繁夫	
30123-A	誰も知らない	昭和 13 年 11 月 12 日	昭和 14 年 1 月 20 日	サトウハチロー	ミス・コロムビア	23,512 枚
30123-B	あの日あの頃	昭和 13 年 11 月 12 日		サトウハチロー	松平晃	
30508-A	新妻模様	昭和 14 年 12 月 6 日	昭和 14 年 12 月 20 日	久保田宵二	霧島昇、松原操	50,061 枚
30508-B	波を越えて	昭和 14 年 12 月 6 日		サトウハチロー	伊藤久男	
100025-A	りぼんむすめ	昭和 15 年 3 月 8 日	昭和 15 年 5 月 20 日	西條八十	渡辺はま子	15,974 枚
100025-B	花ある人生	昭和 15 年 3 月 8 日		高橋掬太郎	霧島昇	
100075-A	ネクタイ屋の娘	昭和 15 年 6 月 8 日	昭和 15 年 7 月 1 日	西條八十	ロッパ	10,864 枚
100075-B	柄じゃないけど	昭和 15 年 6 月 4 日		サトウハチロー	ロッパ、渡辺はま子	
100096-A	秋はさみしい	昭和 15 年 6 月 28 日	昭和 15 年 9 月 20 日	西條八十	糸井しだれ	5,304 枚
100096-B	おもひ出の都	昭和 15 年 7 月 2 日		西條八十	糸井しだれ	
100110-A	男は泣かず	昭和 15 年 7 月 24 日	昭和 15 年 10 月 20 日	野村俊夫	荒貞夫	6,970 枚
100110-B	乙女でも	昭和 15 年 5 月 31 日		藤浦洸	二葉あき子	
100188-B	葵の唄	昭和 15 年 12 月 17 日	昭和 16 年 1 月 20 日	藤浦洸	二葉あき子	20,151 枚
100229-B	春は朗らか	昭和 16 年 1 月 23 日	昭和 16 年 4 月 20 日	藤浦洸	志村道夫	1,403 枚
100264-A	北白川宮能久親王殿下御事蹟奉讃歌	昭和 16 年 3 月 31 日	昭和 16 年 6 月 20 日	矢野峰人	伊藤久男、二葉あき子	1,274 枚
100264-B	蓬莱木遣り音頭	昭和 16 年 4 月 2 日		佐藤惣之助	菊池章子、高倉敏	
100379-A	海の豪族	昭和 16 年 9 月 16 日	昭和 16 年 11 月 20 日	佐藤惣之助	伊藤久男	10,826 枚
100428-A	総進軍の鐘は鳴る	昭和 16 年 12 月 18 日	昭和 17 年 2 月 20 日	西條八十	伊藤武雄	4,487 枚
100428-B	打倒米英	昭和 16 年 12 月 19 日		西條八十	霧島昇、奈良光枝	
100455-A	陥したぞシンガポール	昭和 17 年 2 月 9 日	昭和 17 年 4 月 20 日	西條八十	霧島昇	7,818 枚
100620-A	スキーの唄	昭和 16 年 9 月 11 日	昭和 17 年 12 月 30 日	島田芳文	霧島昇	2,687 枚
100637-A	花白蘭	昭和 17 年 10 月 26 日	昭和 18 年 1 月 20 日	西條八十	渡辺はま子	6,689 枚
100777-A	奉公防空群の歌	昭和 18 年 7 月 13 日	昭和 18 年 10 月 20 日	山口光一	霧島昇、渡辺はま子	〔5,000 枚〕

「レーベルコピー」(日本コロムビア株式会社所蔵)、「売上實数ヨリ見タル流行歌「レコード」ノ變遷」(『SP レコード』35、1999 年 12 月) から作成。〔　〕は初版制造、(　) は内務省の統計枚数を示す。

表２　古賀政男の映画主題歌・挿入歌一覧

レコード番号	曲　名	録音年月日	発売年月日	作詞家	歌手名	映画題名
26486-A	酒は涙か溜息か	昭和６年８月下旬	昭和６年９月20日	高橋掬太郎	藤山一郎	松竹映画『想い出多き女』主題歌
26530-B	青春図絵の唄（貞子の唄）	昭和６年６月２日	昭和６年８月５日	菊池寛	関種子	松竹映画『青春図絵』主題歌
26624-A	丘を越えて	昭和６年10月12日	昭和６年11月20日	島田芳文	藤山一郎	松竹映画『人生の処女航海』主題歌
26624-B	窓に凭れて	昭和６年10月12日		島田芳文	淡谷のり子	新興キネマ『姉』主題歌
26671-A	スキーの唄	昭和６年10月29日	昭和６年12月15日	島田芳文	藤山一郎	新興キネマ『スキーの唄』主題歌
26697-A	町子姉妹の唄	昭和６年11月21日	昭和７年１月10日	菊池寛	河原喜久恵	松竹映画『勝敗』主題歌
26819-A	鳩笛を吹く女の唄	昭和７年２月８日	昭和７年２月17日	佐藤惣之助	井上静雄	日活映画『鳩笛を吹く女』主題歌
26736-A	金色夜叉（お宮の唄）	昭和６年12月26日	昭和７年２月20日	佐藤惣之助	関種子	松竹映画『金色夜叉』主題歌
26828-A	あけみの唄	昭和７年２月15日	昭和７年３月20日	原阿佐緒	関種子	大衆文芸映画『佳人よ何処へ』主題歌
26828-B	佳人よ何処へ	昭和７年３月15日	昭和７年３月20日	原阿佐緒	淡谷のり子	
26875-A	夜霧の港	昭和７年４月14日	昭和７年４月25日	時雨音羽	中野忠晴	日活映画『上海』主題歌
26875-B	さらば上海	昭和７年４月14日		時雨音羽	関種子	日活映画『上海』挿入歌
27023-A	情人の唄	昭和７年６月16日	昭和７年８月20日	大木惇夫	横山良三	松竹映画『情人』主題歌
27069-A	不如帰	昭和７年７月18日	昭和７年８月15日	佐藤惣之助	淡谷のり子	松竹映画『不如帰』主題歌
27069-B	武雄の唄	昭和７年７月18日		佐藤惣之助	中野忠晴	
27111-A	花の東京	昭和７年８月30日	昭和７年９月15日	時雨音羽	中野忠晴、淡谷のり子	日活映画『花の東京』主題歌
27222-A	嵐の鳥	昭和７年11月28日	昭和７年12月５日	西條八十	関種子	松竹映画『暴風帯』主題歌
27222-B	街の狐児（民坊の唄）	昭和７年11月25日		西條八十	丸山和歌子	
27297-A	強くなってね	昭和８年１月13日	昭和８年２月20日	西條八十	渡辺光子	松竹映画『強くなってね』主題歌
27297-B	初恋の唄	昭和８年１月13日		西條八十	関種子	松竹映画『初恋は忘れまじ』主題歌
27507-B	処女よさらば	昭和８年６月25日	昭和８年７月10日	西條八十	関種子	松竹『嫁入り前』
15092A	愛の子守唄	昭和９年12月21日	昭和10年１月10日	高橋掬太郎	松村久男	松竹蒲田特作川田芳子隠退記念映画『母の愛』主題歌
15092B	母よ何処	昭和９年12月25日		高橋掬太郎	松島詩子	
15093A	白い椿の唄	昭和９年12月25日	昭和10年１月末	佐藤惣之助	楠木繁夫	入江プロ特作映画『貞操問答』主題歌
15093B	思い出の雪	昭和９年12月25日		佐藤惣之助	松島詩子	
50001A	泪の二筋道	昭和10年３月12日	昭和10年５月	佐野みつる	小ゆき	千恵蔵プロ『京洛浅春譜』主題歌
50033A	恋は荷物と同じよ	昭和10年４月24日	昭和10年５月15日	瀬川与志	川畑文子、ディック・ミネ	日活映画『うら街の交響楽』主題歌
50055B	二人は若い	昭和10年６月22日	昭和10年６月末	玉川映二	星玲子、ディック・ミネ	日活映画『のぞかれた花嫁』主題歌
50088A	波止場がらす	昭和10年７月29日	昭和10年８月10日	佐藤惣之助	ディック・ミネ	日活オールトーキー『男のまごころ』主題歌
50088B	男のまごころ	昭和10年７月27日		佐藤惣之助	楠木繁夫	
50089A	さむらい鴉	昭和10年８月10日	昭和10年８月10日	児井英男	楠木繁夫	太秦発声『さむらい鴉』主題歌
50104A	夕べ仄かに	昭和10年９月９日	昭和10年10月15日	島田芳文	ディック・ミネ	日活オールトーキー『緑の地平線』主題歌
50112A	緑の地平線	昭和10年９月26日	昭和10年10月上旬	佐藤惣之助	楠木繁夫	日活オールトーキー『緑の地平線』主題歌
50112B	ゆかりの唄	昭和10年９月26日		佐藤惣之助	ディック・ミネ、（台詞）星玲子	
50179A	酒の中から	昭和10年11月25日	昭和10年12月26日	玉川映二	有島通男	日活映画『ジャズの街かど』主題歌
50179B	二人きりなら	昭和10年12月２日		島田磬也	美ち奴	
50180A	純情一座の唄	昭和10年12月19日	昭和11年１月初頭	玉川映二	千早淑子	日活オールトーキー『純情一座』主題歌
50180B	風に吹かれて	昭和10年12月19日		玉川映二	木村肇	
50217A	白衣の佳人	昭和11年１月30日	昭和11年２月11日	佐藤惣之助	ディック・ミネ	入江プロ映画『白衣の佳人』主題歌
50217B	泪の春	昭和11年１月30日		佐藤惣之助	千早淑子	
50243A	啄木の歌	昭和11年２月16日	昭和11年３月15日	島田磬也	楠木繁夫	日活オールトーキー『情熱の詩人啄木』主題歌
50243B	春まだ浅く	昭和11年２月20日		石川啄木	有島通男	
50273A	花見音頭	昭和11年３月６日	昭和11年４月15日	島田磬也	美ち奴、杵淵一朗	日活映画『細君三日天下』主題歌
50273B	細君三日天下	昭和11年３月９日		島田磬也	杉狂児、美ち奴	

レコード番号	曲　名	録音年月日	発売年月日	作詞家	歌手名	映画題名
50275A	拾った貞操	昭和11年3月17日	昭和11月4月15日	黒沼健	江川宇礼雄	日活映画『拾った貞操』主題歌
50275B	若い母の唄	昭和11年3月17日		佐藤惣之助	千早淑子	
50338A	東京ラプソディ	昭和11年5月31日	昭和11月6月15日	門田ゆたか	藤山一郎	PCL映画『東京ラプソディ』主題歌
50338B	東京娘	昭和11年5月31日		佐藤惣之助	藤山一郎	
50373A	慈悲心鳥	昭和11年6月中旬	昭和11年7月7日	佐藤惣之助	楠木繁夫	日活映画『慈悲心鳥』主題歌
50373B	さらば青春	昭和11年6月中旬		佐藤惣之助	藤山一郎	
50488A	風流深川唄	昭和11年7月25日	昭和11年8月10日	正岡容	小林重四郎	日活映画『風流深川唄』主題歌
50488B	深川祭り	昭和11年7月18日		正岡容	美ち奴	
50490A	男の純情	昭和11年8月6日	昭和11年8月25日	佐藤惣之助	藤山一郎	日活映画『魂』主題歌
50490B	愛の小窓	昭和11年8月7日		佐藤惣之助	ディック・ミネ	
50491A	大洋の寵児	昭和11年8月7日	昭和11年8月25日	佐藤惣之助	藤山一郎	PCL映画『大洋の寵児』主題歌
50491B	旅の鴎	昭和11年8月7日		佐藤惣之助	藤山一郎	
50538A	護れ国境	昭和11年9月1日	昭和11年9月20日	佐藤惣之助	楠木繁夫	日活映画『国防全線八千粁』主題歌
50538B	満洲ぶし	昭和11年8月31日		佐藤惣之助	美ち奴	
50539A	街を歩けば	昭和11年9月2日	昭和11年9月20日	玉川映二	小林重四郎、星玲子	日活映画『僕の東京地図』主題歌
50539B	東京双六	昭和11年9月4日		玉川映二	美ち奴	
50581A	女の階級	昭和11年9月30日	昭和11年10月20日	村瀬まゆみ	楠木繁夫	日活映画『女の階級』主題歌
50581B	回想譜	昭和11年10月3日		今城靖児	藤山一郎	
50587A	『あなた』『なんだい』	昭和11年10月15日	昭和11年11月1日	杉狂児	杉狂児、市川春代	日活・PCL・テイチク合同作品、日活音楽映画『からくり歌劇』主題歌
50587B	恋とはこんなものかしら	昭和11年10月15日		島田磬也	ディック・ミネ	
50588A	恋のネオン	昭和11年10月17日	昭和11年11月1日	大谷俊夫	藤山一郎	日活・PCL・テイチク合同作品、日活音楽映画『からくり歌劇』主題歌
50588B	女給哀歌	昭和11年10月17日		島田磬也	神田千鶴子	
1000A	青春の謝肉祭	昭和11年10月17日	昭和11年11月15日	島田磬也、野村俊夫	藤山一郎	PCL映画『東京ラプソディ』挿入歌
1000B	別れの歌	昭和11年10月29日		山川あさを	奥田英子	
1050A	南国の乙女	昭和11年11月10日	昭和11年12月1日	水島洋	奥田英子	日活映画『南の生命線』主題歌
1050B	南の生命線	昭和11年11月10日		水島洋	藤山一郎	
1055A	マイ・マイ・スイート・ハート	昭和11年11月16日	昭和11年12月10日	星野貞志	神田千鶴子	日活・PCL・テイチク合同作品、日活音楽映画『からくり歌劇』主題歌
1055B	アラ恥しい	昭和11年11月14日		星野貞志	木村肇	
1165A	うちの女房にゃ髭がある	昭和11年12月4日	昭和11年12月17日	星野貞志	杉狂児、美ち奴	日活映画『うちの女房にゃ髭がある』主題歌
1165B	あゝそれなのに	昭和11年12月4日		星野貞志	美ち奴	
1167A	丹下左膳	昭和11年12月13日	昭和11年12月25日	佐藤惣之助	楠木繁夫	日活映画『丹下左膳』主題歌
1167B	櫛巻くずし	昭和11年12月13日		佐藤惣之助	美ち奴	
1200A	聖処女の唄	昭和11年12月27日	昭和12年1月8日	佐藤惣之助	藤山一郎	日活映画『検事とその妹』主題歌
1200B	人生の並木路	昭和11年12月27日		佐藤惣之助	ディック・ミネ	
1354A	ラグビー節	昭和12年2月6日	昭和12年2月25日	星野貞志	杉狂児	日活映画『母校の花形』主題歌
1354B	栄冠は我に	昭和12年2月4日		星野貞志	藤山一郎	
1514A	胸をたたいて	昭和12年3月17日	昭和12年4月20日	星野貞志	楠木繁夫	日活映画『ジャズ忠臣蔵』主題歌
1514B	ギターに寄せて	昭和12年3月17日		星野貞志	ディック・ミネ	
1515A	道行シャンソン	昭和12年3月17日	昭和12年4月20日	杉狂児	美ち奴、杉狂児	日活映画『ジャズ忠臣蔵』主題歌
1515B	嬉しい仲	昭和12年3月24日		テイチク文芸部	楠木繁夫、美ち奴	
1678A	白薔薇は咲けど	昭和12年5月13日	昭和12年6月10日	佐藤惣之助	藤山一郎	PCL映画『白薔薇は咲けど』主題歌
1678B	緑の月	昭和12年5月10日		佐藤惣之助	奥田英子	
1757A	真実一路の唄	昭和12年6月21日	昭和12年7月10日	佐藤惣之助	楠木繁夫	日活映画『真実一路』主題歌
1757B	浜辺の哀唱	昭和12年6月23日		佐藤惣之助	奥田英子	
1761A	こんなに楽しい	昭和12年6月	昭和12年7月10日	倉仲佳人	ディック・ミネ	日活映画『宝島総動員』主題歌
1761B	窓は開いてる	昭和12年6月25日		倉仲佳人	藤山一郎、奥田英子	
1762A	乳首の唄	昭和12年6月21日	昭和12年7月10日	倉仲佳人	杉狂児	日活映画『宝島総動員』主題歌
1762B	二人きりの唄	昭和12年6月21日		倉仲佳人	杉狂児、星玲子	
1769A	忠烈大和魂	昭和12年7月22日	昭和12年8月15日	島田磬也	藤山一郎	日活映画『国家総動員シリーズ』主題歌
1769B	出征ぶし	昭和12年7月20日		島田磬也	美ち奴	
1780A	軍国の母	昭和12年8月7日	昭和12年9月15日	島田磬也	美ち奴	日活映画『国家総動員』主題歌
1780B	動員令	昭和12年7月20日		島田磬也	楠木繁夫	

レコード番号	曲　名	録音年月日	発売年月日	作詞家	歌手名	映画題名
1855A	国家総動員	昭和12年8月1日	昭和12年8月	島田磬也	藤山一郎	日活映画『国家総動員シリーズ』主題歌
1855B	銃後の赤誠	昭和12年8月1日		島田磬也	奥田英子	
N103A	美しき鷹	昭和12年9月29日	昭和12年10月25日	佐藤惣之助	由利あけみ	東宝映画『美しき鷹』主題歌
N103B	乙女心は	昭和12年9月29日		佐藤惣之助	ディック・ミネ	
N104A	勇敢なる航空兵	昭和12年10月9日	昭和12年10月26日	佐藤惣之助	藤山一郎	東宝映画『愛国六人娘』主題歌
N104B	愛国六人娘	昭和12年10月9日		佐藤惣之助	由利あけみ	
N105A	時代の霧	昭和12年10月28日	昭和12年11月17日	門田ゆたか	楠木繁夫	日活映画『時代の霧』主題歌
N105B	愛の小鳩	昭和12年10月28日		門田ゆたか	美ち奴	
N106A	恋のハワイ	昭和12年10月9日	昭和12年11月17日	吉本英夫	ディック・ミネ	日活映画『恋愛ハワイ航空』主題歌
N106B	ひしめき音頭	昭和12年10月11日		倉仲佳人	杉狂児	
N113A	誰なの？	昭和12年12月4日	昭和12年12月20日	倉仲房雄	ディック・ミネ	東宝映画『花束の夢』主題歌
N113B	花束の夢	昭和12年12月1日		倉仲房雄	由利あけみ	
N114A	二人のこの日	昭和12年12月4日	昭和13年2月1日	山上重夫	ディック・ミネ、由利あけみ	日活映画『わたし幸福よ』主題歌
N114B	わたし幸福よ	昭和12年12月4日		山上重夫	杉狂児、星玲子	
N121A	友よ意気高らかに	昭和13年4月5日	昭和13年5月1日	倉仲房雄	楠木繁夫	日活映画『友よ意気高らかに』主題歌
N121B	友情夜曲	昭和13年4月5日		倉仲房雄	藤山一郎	
N122A	人生劇場	昭和13年4月29日	昭和13年5月23日	佐藤惣之助	楠木繁夫	日活映画『人生劇場（残侠篇）』主題歌
N122B	銀杏がえしで	昭和13年4月29日		佐藤惣之助	美ち奴	
N124A	海の護り	昭和13年5月23日	昭和13年5月	松島慶三	帝国海軍軍楽隊	日活映画『海の護り』主題歌
N124B	波上の月	昭和13年5月23日		松島慶三	藤山一郎	
N138A	茶房の花	昭和13年6月2日	昭和13年6月25日	海野七郎	藤山一郎、由利あけみ	日活映画『茶房の花々』主題歌
N138B	心の雨	昭和13年6月2日		海野七郎	由利あけみ	
N153A	殻をぬぎすてて	昭和13年7月9日	昭和13年8月1日	倉仲房雄	杉狂児	日活映画『楽天公子』主題歌
N153B	合歓の木蔭	昭和13年7月5日		倉仲房雄	岡蘭子	
N228A	弥次喜多道中記	昭和13年11月21日	昭和13年12月1日	時雨音羽	楠木繁夫、ディック・ミネ	日活映画『弥次喜多道中記』主題歌
N228B	夢の青空	昭和13年11月19日		時雨音羽	美ち奴	
30508-A	新妻模様	昭和14年12月6日	昭和14年12月20日	久保田宵二	霧島昇、松原操	松竹大船映画『新妻問答』主題歌
30508-B	波を越えて	昭和14年12月6日		サトウハチロー	伊藤久男	
30526-A	なつかしの歌声	昭和15年1月23日	昭和15年2月15日	西條八十	藤山一郎、二葉あき子	東宝映画『春よいづこ』主題歌
30526-B	春よいづこ	昭和15年1月23日		西條八十	藤山一郎、二葉あき子	
100018-A	蛇姫絵巻	昭和15年2月28日	昭和15年3月20日	西條八十	志村道夫、奥山彩子	東宝映画『蛇姫様』主題歌
100041-A	新妻鏡	昭和15年3月19日	昭和15年4月10日	佐藤惣之助	霧島昇、二葉あき子	東宝映画『新妻鏡』主題歌
100041-B	目ン無い千鳥	昭和15年3月19日		サトウハチロー	霧島昇、ミス・コロムビア	
100091-A	相呼ぶ歌	昭和15年6月21日	昭和15年7月5日	西條八十	霧島昇、菊池章子	松竹映画『愛の暴風』主題歌
100101-A	熱砂の誓い	昭和15年8月13日	昭和15年10月20日	西條八十	伊藤久男	東宝映画『熱砂の誓い』主題歌
100101-B	紅い睡蓮	昭和15年8月21日		西條八十	李香蘭	
100151-A	馬	昭和15年10月25日	昭和15年12月中旬	佐藤惣之助	伊藤久男、菊池章子	東宝映画『馬』主題歌
100188-B	葵の唄	昭和15年12月17日	昭和16年1月20日	藤浦洸	二葉あき子	日活映画『母系家族』主題歌
100295-A	歌えば天国	昭和16年5月9日	昭和16年6月10日	西條八十	藤山一郎、二葉あき子、古川ロッパ	東宝映画『歌えば天国』主題歌
100295-B	リンゴは紅い	昭和16年5月9日		サトウハチロー	ロッパ、松原操、藤山一郎	
100379-A	海の豪族	昭和16年9月16日	昭和16年11月20日	佐藤惣之助	伊藤久男	台湾総督府日活共同製作『南方発展史・海の豪族』主題歌
100399-A	迎春花	昭和17年3月3日	昭和17年3月20日	西條八十、白文会	李香蘭	満映作品松竹応援『迎春花』主題歌
100528-B	母を呼ぶ歌	昭和17年5月25日	昭和17年6月7日	西條八十	高峰三枝子、霧島昇	松竹映画『日本の母』主題歌

レコード番号	曲　名	録音年月日	発売年月日	作詞家	歌手名	映画題名
100586-A	祖国の祈り	昭和 17 年 7 月 15 日	昭和 17 年 8 月 20 日	藤浦洸	伊藤久男	松竹映画『誓いの港』主題歌
100586-B	誓いの港	昭和 17 年 7 月 17 日		藤浦洸	霧島昇	
100614-A	どうぢゃね元気かね	昭和 17 年 9 月 10 日	昭和 17 年 11 月 20 日	サトウハチロー	楠木繁夫	大映映画『歌う狸御殿』主題歌
100614-B	歌う狸御殿	昭和 17 年 9 月 22 日		サトウハチロー	コロムビア合唱団	
100615-A	月の小島	昭和 17 年 9 月 18 日	昭和 17 年 11 月 20 日	西條八十	楠木繁夫、三原純子	
100615-B	花のこころ	昭和 17 年 9 月 22 日		サトウハチロー	豆千代	
100650-A	故郷の白百合	昭和 17 年 11 月 12 日	昭和 17 年 12 月 25 日	サトウハチロー	霧島昇、松原操	大映映画『青空交響曲』主題歌
100650-B	青い牧場	昭和 17 年 11 月 12 日		サトウハチロー	藤山一郎、奈良光枝	
100664-A	若き日の夢	昭和 17 年 12 月 26 日	昭和 18 年 1 月 20 日	西條八十	李香蘭	松竹映画『戦いの街』主題歌
100664-B	戦いの街に春が来る	昭和 17 年 12 月 9 日		西條八十	楠木繁夫、菊池章子	
100690-A	サヨンの歌	昭和 18 年 1 月 28 日	昭和 18 年 5 月 20 日	西條八十	李香蘭	満映映画『サヨンの鐘』主題歌
100690-B	なつかしの蕃社	昭和 18 年 1 月 28 日		西條八十	霧島昇、菊池章子	
100762-B	夏子の歌	昭和 18 年 6 月 29 日	昭和 18 年 7 月 25 日	西條八十	渡辺はま子、楠木繁夫	大映映画『我が家の風』主題歌
100823-B	雲のふるさと	昭和 18 年 9 月 3 日	昭和 18 年 12 月 8 日	大木惇夫	伊藤久男	東宝映画『あの旗を撃て』主題歌
100899-A	祖国の花	昭和 19 年 8 月 9 日	昭和 19 年 9 月上旬	サトウハチロー	轟夕起子、奈良光枝、真木絢子、渡辺一恵、東海林寿代	東宝映画『勝利の日まで』主題歌
A-84A	麗人の唄	昭和 21 年 3 月 30 日	昭和 21 年 5 月	西條八十	霧島昇	東宝映画『麗人』主題歌
A-84B	緋総の籠	昭和 21 年 4 月 9 日		中村積（補作：西條八十）	霧島昇、二葉あき子	
A-95A	乙女舟	昭和 21 年 5 月 1 日	昭和 21 年 6 月	西條八十	霧島昇、奈良光枝	大映映画『或る夜の接吻』主題歌
A-95B	悲しき竹笛	昭和 21 年 5 月 1 日		西條八十	近江俊郎、奈良光枝	
A-230A	今宵妻となりぬ	昭和 22 年 2 月 13 日	昭和 22 年 3 月下旬	サトウハチロー	高峰三枝子	大映『今宵妻となりぬ』主題歌
A-230B	四つの青春	昭和 22 年 2 月 5 日		サトウハチロー	藤山一郎	
A-312A	旅の舞姫	昭和 22 年 8 月 19 日	昭和 22 年 9 月下旬	西條八十	霧島昇	東横映画『こゝろ月の如く』主題歌
A-312B	こゝろ月の如く	昭和 22 年 9 月 1 日		西條八十	二葉あき子	
A-367A	あの夢この夢	昭和 23 年 2 月 9 日	昭和 23 年 3 月中旬	西條八十	霧島昇、二葉あき子	新東宝映画『あの夢この夢』主題歌
A-367B	紅雀の歌	昭和 23 年 2 月 9 日		西條八十	霧島昇	
A-421A	三百六十五夜	昭和 23 年 6 月 21 日	昭和 23 年 7 月 20 日	西條八十	霧島昇、松原操	新東宝映画『三百六十五夜』主題歌
A-421B	恋の曼珠沙華	昭和 23 年 6 月 21 日		西條八十	二葉あき子	
A-443A	ぜったい愛して	昭和 23 年 6 月 29 日	昭和 23 年 8 月 5 日	サトウハチロー	渡辺はま子、楠木繁夫	大映映画『ぜったい愛して』主題歌
A-443B	とってもわからない	昭和 23 年 6 月 28 日		サトウハチロー	杉狂児、日高澄子	
A-446A	誰に愛せん	昭和 23 年 8 月 6 日	昭和 23 年 9 月上旬	藤浦洸	高峰三枝子	大映映画『誰に恋せん』主題歌
A-446B	友情の歌	昭和 23 年 8 月 19 日		藤浦洸	藤山一郎	
A-482A	夢よもういちど	昭和 23 年 11 月 13 日	昭和 23 年 12 月 20 日	西條八十	二葉あき子	新東宝映画『夢よもういちど』主題歌
A-482B	愛の灯かげ	昭和 23 年 11 月 10 日		西條八十	近江俊郎、奈良光枝	
A-563A	人間模様	昭和 24 年 4 月 21 日	昭和 24 年 5 月 25 日	西條八十	霧島昇	新東宝映画『人間模様』主題歌
A-563B	夜のひなげし	昭和 24 年 4 月 19 日		西條八十	二葉あき子	
A-567A	母呼ぶ鳥	昭和 24 年 6 月 21 日	昭和 24 年 7 月 21 日	西條八十	伊藤久男、高峰麻梨子	松竹映画『母呼ぶ鳥』主題歌
A-567B	悲しきすみれ	昭和 24 年 6 月 20 日		西條八十	二葉あき子	

レコード番号	曲　名	録音年月日	発売年月日	作詞家	歌手名	映画題名
A-598A	思い出月夜	昭和 24 年 6 月 4 日	昭和 24 年 7 月 1 日	西條八十	霧島昇	新東宝映画『グッド・バイ』主題歌
A-598B	グッド・バイ	昭和 24 年 5 月 28 日		藤浦洸	藤山一郎、池真理子	
A-610A	湯の町夜曲	昭和 24 年 7 月 20 日	昭和 24 年 8 月 11 日	野村俊夫	近江俊郎	新東宝映画『湯の町夜曲』主題歌
A-610B	涙のおもかげ	昭和 24 年 7 月 20 日		野村俊夫	近江俊郎、山根寿子	
A-624A	影を慕いて	昭和 24 年 9 月 17 日	昭和 24 年 11 月 21 日	古賀政男	藤山一郎	新東宝映画『影を慕いて』主題歌
A-624B	希望に燃えて	昭和 24 年 9 月 16 日		サトウハチロー	伊藤久男、霧島昇、近江俊郎、高倉敏、二葉あき子、奈良光枝	
A-686A	妻の部屋	昭和 24 年 10 月 31 日	昭和 24 年 12 月 1 日	西條八十	奈良光枝、近江俊郎	東横映画『妻の部屋』主題歌
A-686B	青い樹蔭	昭和 24 年 10 月 31 日		西條八十	二葉あき子	
A-687A	ああどうなさる	昭和 24 年 10 月 28 日	昭和 25 年 1 月 1 日	サトウハチロー	久保幸江	東横映画『ホームラン狂時代』主題歌
A-687B	花に寄せて	昭和 24 年 10 月 28 日		サトウハチロー	奈良光枝、志村道夫	
A-710A	処女宝の歌	昭和 24 年 11 月 30 日	昭和 25 年 1 月 1 日	西條八十	近江俊郎、高峰麻梨子	新東宝映画『処女宝』主題歌
A-710B	嘆きの孔雀	昭和 24 年 11 月 30 日		西條八十	奈良光枝	
A-789A	楽しい仲間	昭和 25 年 2 月 23 日	昭和 25 年 4 月 1 日	藤浦洸	小畑実、高倉敏、鶴田六郎	東横映画『与太者と天使』主題歌
A-789B	涙のゆりかご	昭和 25 年 2 月 23 日		藤浦洸	織井茂子	
A-1034A	湯の町物語	昭和 25 年 11 月 17 日	昭和 26 年 1 月 15 日	野村俊夫	近江俊郎	新東宝映画『月の出の接吻』主題歌
A-1165A	夜の未亡人	昭和 26 年 5 月 23 日	昭和 26 年 6 月 20 日	西條八十	奈良光枝	新東宝・瀧村プロ提携映画『夜の未亡人』主題歌
A-1165B	アトリエの花	昭和 26 年 5 月 23 日		西條八十	鶴田六郎、高峰麻梨子	
A-1425A	白虎隊	昭和 26 年 3 月 27 日	昭和 27 年 6 月 15 日	野村俊夫	霧島昇	大映映画『花の白虎隊』主題歌
A-1470A	ゲイシャ・ワルツ	昭和 27 年 5 月 31 日	昭和 27 年 8 月 15 日	西條八十	神楽坂はん子	新東宝映画『ゲイシャ・ワルツ』主題歌
A-1470B	だから今夜は酔わせてネ	昭和 27 年 6 月 18 日		西條八十	神楽坂はん子	
A-1600A	こんな心待ち察してネ	昭和 27 年 12 月 10 日	昭和 28 年 1 月 10 日	西條八十	久保幸江、高倉敏	大映映画『新婚のろけ節』主題歌
A-1600B	そんなのないわよ	昭和 27 年 12 月 10 日		水上京弥	久保幸江	
A-1851A	春色お伝の方	昭和 28 年 11 月 20 日	昭和 29 年 1 月 15 日	西條八十	神楽坂はん子	新東宝映画『春色お伝の方』主題歌
A-1851B	おらんだ屋敷の花	昭和 28 年 11 月 7 日		西條八十	永田とよこ	
A-1965A	こんな美男子見たことない	昭和 29 年 3 月 17 日	昭和 29 年 4 月 20 日	石本美由起	神楽坂はん子	大映映画『こんな美男子みたことない』主題歌
A-1965B	好いて好かれて	昭和 29 年 3 月 26 日		野村俊夫	神楽坂玉枝、山中ひろし	
A-2038A	かくて夢あり	昭和 29 年 5 月 4 日	昭和 29 年 6 月 10 日	西條八十	青木光一	日活映画『かくて夢あり』主題歌
A-2060A	こんなアベック見たことない	昭和 29 年 6 月 26 日	昭和 29 年 7 月 15 日	石本美由起	神楽坂はん子	大映映画『こんなアベック見たことない』主題歌
A-2060B	ほんまにしゃーない	昭和 29 年 6 月 26 日		石本美由起	神楽坂はん子	
A-2131A	こんな奥様見たことない	昭和 29 年 8 月 27 日	昭和 29 年 9 月 25 日	石本美由起	神楽坂はん子	大映映画『こんな奥様見たことない』主題歌
A-2158A	お月様には悪いけれど	昭和 29 年 9 月 18 日	昭和 29 年 11 月 10 日	野村俊夫	神楽坂はん子	日活映画『お月様には悪いけれど』主題歌
A-2158B	プロレス拳	昭和 29 年 9 月 29 日		野村俊夫	神楽坂はん子、中島孝	
A-2227A	娘船頭さん	昭和 29 年 11 月 18 日	昭和 30 年 3 月 10 日	西條八十	美空ひばり	松竹映画『娘船頭さん』主題歌
A-2227B	あやめ踊り	昭和 29 年 12 月 28 日		西條八十	美空ひばり	
A-2271A	暁の合唱	昭和 30 年 2 月 14 日	昭和 30 年 3 月 15 日	西條八十	香川京子	大映映画『暁の合唱』主題歌
A-2271B	シクラメン咲けど	昭和 30 年 2 月 19 日		西條八十	奈良光枝	
A-2287A	花のゆくえ	昭和 30 年 3 月 16 日	昭和 30 年 4 月 10 日	門田ゆたか	及川由子	ラジオ東京連続放送劇・日活映画『花のゆくえ』主題歌
A-2287B	燈台のある町	昭和 30 年 3 月 7 日		門田ゆたか	奈良光枝	

レコード番号	曲　名	録音年月日	発売年月日	作詞家	歌手名	映画題名
A-2290A	緋牡丹日記	昭和 30 年 4 月 7 日	昭和 30 年 5 月 1 日	野村俊夫	青木光一、コロムビア・ローズ	新東宝『緋牡丹日記』主題歌
A-2290B	憧れは空の彼方に	昭和 30 年 3 月 28 日		野村俊夫	中島孝、京町香江	
A-2344A	江戸千両小唄	昭和 30 年 6 月 11 日	昭和 30 年 7 月 25 日	西條八十	高田浩吉	松竹映画『お役者小僧、江戸千両小幟』主題歌
A-2344B	お役者小僧	昭和 30 年 6 月 11 日		西條八十	高田浩吉	
A-2351A	名月佐太郎笠	昭和 30 年 4 月 18 日	昭和 30 年 9 月 15 日	松坂直美	高田浩吉	新東宝映画『名月佐太郎笠』主題歌
A-2351B	青空道中	昭和 30 年 6 月 10 日		石本美由起	高田浩吉	
A-2414A	浩吉ばやし	昭和 30 年 9 月 3 日	昭和 30 年 12 月 10 日	西沢爽	高田浩吉	新東宝映画『名月佐太郎笠』挿入歌
A-2414B	別れがらす	昭和 30 年 9 月 3 日		石本美由起	高田浩吉	
A-2433A	怒濤の男	昭和 30 年 10 月 29 日	昭和 31 年 1 月 10 日	野村俊夫	美空ひばり	日活映画『力道山物語』主題歌
A-2433B	栄冠目指して	昭和 30 年 10 月 29 日		野村俊夫	美空ひばり	
A-2503A	乙女心の十三夜	昭和 31 年 1 月 27 日	昭和 31 年 3 月 10 日	西條八十	島倉千代子	日活映画『乙女心の十三夜』主題歌
A-2503A	流す涙はうそじゃない	昭和 29 年 11 月 11 日		野村俊夫	中島孝	
A-2602A	涙のおしろい花	昭和 31 年 7 月 18 日	昭和 31 年 9 月	西條八十	島倉千代子	新東宝映画『新妻鏡』主題歌
A-2602B	目ン無い化粧	昭和 31 年 7 月 18 日		西條八十	霧島昇、島倉千代子	
A-2671A	土俵の華	昭和 31 年 11 月 9 日	昭和 31 年 12 月 20 日	島田磬也	峰村孝夫	日活映画『若の花物語・土俵の鬼』主題歌
A-2671B	流れの旅相撲	昭和 31 年 11 月 7 日		島田磬也	霧島昇、島倉千代子	
A-2778A	吉良の仁吉はよい男	昭和 32 年 3 月 16 日	昭和 32 年 5 月 1 日	西沢爽	勝新太郎	大映映画『二十九人の喧嘩状』主題歌
A-2778B	相惚れ道中	昭和 32 年 3 月 16 日		西沢爽	勝新太郎、花村菊江	
A-2780A	永遠に答えず	昭和 31 年 12 月 27 日	昭和 32 年 6 月 1 日	西沢爽	島倉千代子	KR 連続ドラマ、日活映画『永遠に答えず』主題歌
A-2780B	愛情一路	昭和 32 年 4 月 8 日		西沢爽	霧島昇	
A-2904A	雪之丞変化	昭和 32 年 9 月 25 日	昭和 32 年 11 月 1 日	西條八十	美空ひばり	新東宝映画『競艶雪之丞変化』主題歌
A-2904B	江戸の闇太郎	昭和 32 年 9 月 25 日		西條八十	美空ひばり	
A-2942A	残り火の恋	昭和 32 年 11 月 30 日	昭和 33 年 1 月 2 日	野村俊夫	能沢佳子	新東宝映画『女の防波堤』主題歌
A-2942B	どうとも勝手にしておくれ	昭和 32 年 11 月 30 日		野村俊夫	能沢佳子	
A-2966A	愛はいずこへ	昭和 33 年 1 月 23 日	昭和 33 年 2 月 20 日	西沢爽	能沢佳子	日活映画『続・永遠に答えず』主題歌
A-2966B	涙の十字架	昭和 33 年 1 月 23 日		西沢爽	能沢佳子	
A-3075A	愛しきあの人	昭和 33 年 5 月 10 日	昭和 33 年 8 月 15 日	西沢爽	コロムビア・ローズ	ラジオ東京連続放送劇『愛しきあの人』主題歌
A-3075B	愛の両手を	昭和 33 年 6 月 28 日		西沢爽	神戸一郎	
A-3131A	芸者マーチ	昭和 33 年 11 月 7 日	昭和 33 年 12 月 1 日	西條八十	岡田ゆり子	松竹映画『晴れて今宵は』主題歌
A-3131B	パパよ踊ろう	昭和 33 年 11 月 8 日		西條八十	岡田ゆり子	
A-3136A	東京の花嫁さん	昭和 33 年 11 月 6 日	昭和 34 年 1 月 15 日	西條八十	能沢佳子	日活映画『東京の花嫁さん』主題歌
A-3147A	一本気仙太郎節	昭和 33 年 12 月 5 日	昭和 34 年 2 月 15 日	西沢爽	村田英雄	松竹映画『一本気仙太郎』主題歌
A-3147B	逢いに来たのか	昭和 33 年 12 月 5 日		西沢爽	村田英雄	
SAS215A	花と怒濤	昭和 38 年 12 月 21 日	昭和 39 年 2 月 20 日	杉野まもる	小林旭	日活映画『花と怒濤』主題歌
SAS215B	男一筋	昭和 38 年 12 月 21 日		滝田順	小林旭	
SAS396A	柔	昭和 39 年 9 月 28 日	昭和 39 年 11 月 20 日	関沢新一	美空ひばり	NTV テレビ『柔』主題歌
SAS499A	お島仙太郎	昭和 40 年 3 月 22 日	昭和 40 年 5 月 10 日	石本美由起	美空ひばり（台詞：林与一）	東宝映画『新蛇姫様・お島仙太郎』主題歌
SAS499B	蛇姫様	昭和 40 年 3 月 22 日		石本美由起	美空ひばり	
SAS609A	柔の男	昭和 40 年 9 月 4 日	昭和 40 年 11 月 5 日	関沢新一	美空ひばり	NET テレビ映画『続・柔』主題歌
SAS1074A	夢と知りせば	昭和 43 年 1 月 8 日	昭和 43 年 3 月 5 日	西沢爽	梢まこ	NET 映画『夢と知りせば』主題歌
SAS1074B	しあわせにさよならを	昭和 43 年 1 月 8 日		西沢爽	梢まこ	NET 映画『夢と知りせば』挿入歌
SAS1251A	永訣の詩	昭和 44 年 1 月 7 日	昭和 44 年 2 月 15 日	横井弘	舟木一夫	松竹映画『永訣』主題歌
SAS1662A	花と龍	昭和 48 年 1 月 5 日	昭和 48 年 3 月 10 日	藤田まさと	美空ひばり	松竹映画『花と龍』主題歌
SAS1662B	風の子守唄	昭和 48 年 1 月 5 日		藤田まさと	美空ひばり	松竹映画『花と龍』挿入歌

『レーベルコピー』（日本コロムビア株式会社所蔵）、『吹込報告書』昭和 9 年～ 13 年（テイチクエンタテインメント所蔵）、『古賀メロディ誕生七〇年記念　古賀政男大全集―二十世紀の遺産―』（日本コロムビア株式会社、1998 年）、『古賀政男　黄金時代の集大成―SP 盤復刻―』（株式会社テイチクエンタテインメント、2004 年）の別冊解説書から作成。

表３　古賀政男のカバー曲一覧

	レコード番号	曲　名	録音年月日	発売年月日	作詞家	歌手名
1	51519A＊	日本橋から	昭和５年10月20日	昭和５年12月20日	浜田広介	佐藤千夜子
	26748A	日本橋から	昭和７年１月15日	昭和７年２月20日	浜田広介	関種子
	A-2495B	日本橋から	昭和30年11月25日	昭和31年４月	浜田広介	島倉千代子
2	51519-B＊	影を慕ひて	昭和５年10月20日	昭和５年12月20日	古賀政男	佐藤千夜子
	26748-B	影を慕ひて	昭和６年１月15日	昭和７年２月20日	古賀政男	藤山一郎
	15070-A※	影を慕ひて	昭和９年11月５日	昭和９年12月１日	古賀政男	楠木繁夫
	A-624A	影を慕いて	昭和24年９月17日	昭和24年11月21日	古賀政男	藤山一郎
3	26325-B	月の浜辺	昭和６年４月上旬	昭和６年６月20日	島田芳文	河原喜久恵
	A-1517B	月の浜辺	昭和27年７月31日	昭和27年10月10日	島田芳文	安藤まり子
4	26671-A	スキーの唄	昭和６年10月29日	昭和６年12月15日	島田芳文	藤山一郎
	15080A※	スキーの唄	昭和９年11月５日	昭和９年12月15日	島田芳文	楠木繁夫
	100620-A	スキーの唄	昭和16年９月11日	昭和17年12月20日	島田芳文	霧島昇
5	26671-B	美はしの宵	昭和６年11月２日	昭和６年12月15日	島田芳文	関種子
	15080B	美はしの宵	昭和９年11月９日	昭和９年12月15日	島田芳文	中野百合子
	A-2496B	美わしの宵	昭和30年11月21日	昭和31年４月	島田芳文	湯川きよ美
6	26698-A	嘆きの夜曲	昭和６年11月26日	昭和７年１月20日	西岡水朗	関種子
	A-2497A	嘆きの夜曲	昭和30年12月16日	昭和31年４月	西岡水朗	奈良光枝
7	26875-B	さらば上海	昭和７年４月14日	昭和７年４月25日	時雨音羽	関種子
	A028B	さらば上海	昭和13年11月下旬	昭和14年８月15日	時雨音羽	李香蘭
8	27353-A	サーカスの唄	昭和８年３月10日	昭和８年３月15日	西條八十	松平晃
	A-1518B	サーカスの唄	昭和27年７月17日	昭和27年10月10日	西條八十	青木光一
9	27674-A	さらば故郷	昭和８年11月２日	昭和８年12月20日	西條八十	松平晃
	A-1342A	さらば故郷	昭和26年12月15日	昭和27年２月１日	西條八十	近江俊郎
10	15093A※	白い椿の唄	昭和９年12月25日	昭和10年１月末	佐藤惣之助	楠木繁夫
	A-1615B	白椿の歌	昭和27年８月12日	昭和28年３月15日	佐藤惣之助	霧島昇
11	50033A	恋は荷物と同じよ	昭和10年４月24日	昭和10年５月15日	瀬川与志	川畑文子、ディック・ミネ
	50192B	恋は荷物と同じよ	昭和10年11月28日	昭和11年１月10日	瀬川与志	上村まり子、バートン・クレーン
12	50055B※	二人は若い	昭和10年６月22日	昭和10年６月末	玉川映二	星玲子、ディック・ミネ
	A-1614B	二人は若い	昭和27年10月31日	昭和28年３月15日	サトウハチロー	久保幸江、加藤雅夫
13	50088B※	男のまごころ	昭和10年７月27日	昭和10年８月10日	佐藤惣之助	楠木繁夫
	A-2192B	男のまごころ	昭和29年９月11日	昭和30年１月15日	野村俊夫	中島孝
14	50104A※	夕べ仄かに	昭和10年９月９日	昭和10年10月15日	島田芳文	ディック・ミネ
	A-1613B	夕べ仄かに	昭和27年10月30日	昭和28年３月15日	島田芳文	奈良光枝
15	50112A※	緑の地平線	昭和10年９月26日	昭和10年10月上旬	佐藤惣之助	楠木繁夫
	A-1614A	緑の地平線	昭和27年12月27日	昭和28年３月15日	佐藤惣之助	青木光一
16	50243B※	春まだ浅く	昭和11年２月20日	昭和11年３月15日	石川啄木	有島通男
	SA180B	春まだ浅く	昭和34年２月５日	昭和34年４月15日	石川啄木	森繁久彌
17	50335A※	白浪五人男	昭和11年５月６日	昭和11年５月中旬	正岡容	楠木繁夫、美ち奴、藤山一郎、木村肇、杵淵一朗
	A-2162B	白浪五人男	昭和29年10月２日	昭和29年12月10日	正岡容	霧島昇、久保幸江、高倉敏、岡本敦郎、若山彰
18	50335B※	三人吉三の唄	昭和11年５月６日	昭和11年５月中旬	正岡容	美ち奴、有島通男、楠木繁夫
	A-2162A	三人吉三	昭和29年10月５日	昭和29年12月10日	正岡容	神楽坂はん子、青木光一、中島孝

	レコード番号	曲　名	録音年月日	発売年月日	作詞家	歌手名
19	50338A※	東京ラプソディ	昭和 11 年 5 月 31 日	昭和 11 月 6 月 15 日	門田ゆたか	藤山一郎
	A-1517A	東京ラプソディー	昭和 27 年 7 月 29 日	昭和 27 年 10 月 10 日	門田ゆたか	藤山一郎
20	50338B※	東京娘	昭和 11 年 5 月 31 日	昭和 11 月 6 月 15 日	佐藤惣之助	藤山一郎
	A-2496A	東京娘	昭和 30 年 11 月 24 日	昭和 31 年 4 月	佐藤惣之助	青木光一
21	50490A※	男の純情	昭和 11 年 8 月 6 日	昭和 11 年 8 月 25 日	佐藤惣之助	藤山一郎
	A-1613A	男の純情	昭和 27 年 12 月 27 日	昭和 28 年 3 月 15 日	佐藤惣之助	古賀政男
22	1165A※	うちの女房にゃ髭がある	昭和 11 年 12 月 4 日	昭和 11 年 12 月 17 日	星野貞志	杉狂児、美ち奴
	A-2131B	うちの女房にや髭がある	昭和 29 年 7 月 13 日	昭和 29 年 9 月 25 日	星野貞志	高倉敏、久保幸江
23	1165B※	あゝそれなのに	昭和 11 年 12 月 4 日	昭和 11 年 12 月 17 日	星野貞志	美ち奴
	A-1518A	あゝそれなのに	昭和 27 年 8 月 2 日	昭和 27 年 10 月 10 日	サトウハチロー	神楽坂はん子
24	1200B※	人生の並木路	昭和 11 年 12 月 27 日	昭和 12 年 1 月 8 日	佐藤惣之助	ディック・ミネ
	A-1516A	人生の並木路	昭和 27 年 7 月 22 日	昭和 27 年 10 月 10 日	佐藤惣之助	古賀政男
25	1280A※	青い背広で	昭和 12 年 1 月 30 日	昭和 12 年 2 月 10 日	佐藤惣之助	藤山一郎
	A-1615A	青い背広で	昭和 27 年 11 月 13 日	昭和 28 年 3 月 15 日	佐藤惣之助	藤山一郎
26	1280B※	青春日記	昭和 12 年 1 月 30 日	昭和 12 年 2 月 10 日	佐藤惣之助	藤山一郎
	A-2497B	青春日記	昭和 31 年 2 月 20 日	昭和 31 年 4 月	佐藤惣之助	鳴海日出夫
27	N102A※	白虎隊	昭和 12 年 6 月 11 日	昭和 12 年 10 月 15 日	島田磬也	藤山一郎
	A-1425A	白虎隊	昭和 26 年 3 月 27 日	昭和 27 年 6 月 15 日	野村俊夫	霧島昇
28	N102B※	小楠公	昭和 12 年 9 月 11 日	昭和 12 年 10 月 15 日	島田磬也	古賀久子
	SAS442-A	小楠公	昭和 39 年 11 月 25 日	昭和 40 年 3 月 20 日	西沢爽	小林幸子
29	N122A※	人生劇場	昭和 13 年 4 月 29 日	昭和 13 年 5 月 23 日	佐藤惣之助	楠木繁夫
	A-2495A	人生劇場	昭和 30 年 11 月 11 日	昭和 31 年 4 月	佐藤惣之助	中島孝
	A-3158B	人生劇場	昭和 34 年 1 月 19 日	昭和 34 年 4 月 4 日	佐藤惣之助	村田英雄
30	100041-A	新妻鏡	昭和 15 年 3 月 19 日	昭和 15 年 4 月 10 日	佐藤惣之助	霧島昇、二葉あき子
	SAS1295-A	新妻鏡	昭和 44 年 4 月 5 日	昭和 44 年 6 月 15 日	佐藤惣之助	アントニオ古賀
31	100041-B	目ン無い千鳥	昭和 15 年 3 月 19 日	昭和 15 年 4 月 10 日	サトウハチロー	霧島昇、ミス・コロムビア
	SAS1295-B	目ン無い千鳥	昭和 44 年 4 月 5 日	昭和 44 年 6 月 15 日	サトウハチロー	大川栄策
32	100081B	月夜船	昭和 19 年 6 月 8 日	昭和 19 年 7 月上旬	藤浦洸	波平暁男
	A-623B	月夜船	昭和 24 年 8 月 11 日	昭和 24 年 11 月 1 日	藤浦洸	近江俊郎
33	A-500A	トンコ節	昭和 23 年 11 月 13 日	昭和 24 年 1 月 10 日	西條八十	楠木繁夫、久保幸江
	A-1079A	トンコ節	昭和 25 年 12 月 19 日	昭和 26 年 2 月 15 日	西條八十	久保幸江、加藤雅夫
34	A-2334B	霧の川中島	昭和 30 年 5 月 16 日	昭和 30 年 8 月 15 日	野村俊夫	中島孝
	SAS2002-A	霧の川中島	昭和 44 年 6 月 2 日	昭和 44 年 8 月 1 日	野村俊夫	杉良太郎（詩吟：沢神洲）
35	SA-386A	悲しい酒	昭和 35 年 3 月 9 日	昭和 35 年 6 月 15 日	石本美由起	北見沢惇
	SAS-731	悲しい酒	昭和 41 年 4 月 30 日	昭和 41 年 6 月 10 日	石本美由起	美空ひばり
	ADX-214B	悲しい酒（台詞入り）	昭和 42 年 3 月 10 日	昭和 43 年 5 月 10 日	石本美由起	美空ひばり

「レーベルコピー」（日本コロムビア株式会社所蔵）、「吹込報告書」昭和 9 年～ 13 年（テイチクエンタテインメント所蔵）、『古賀メロディ誕生七〇年記念　古賀政男大全集―二十世紀の遺産―』（日本コロムビア株式会社、1998 年）から作成。＊はビクター、※はテイチクを示す。

表４　古賀政男のリメイク曲一覧

	レコード番号	曲　名	録音年月日	発売年月日	作詞家	歌手名
1	51091A＊	文のかほり	昭和４年12月23日	昭和５年２月25日	古賀政男	佐藤千夜子
	27353-B	来る来るサーカス	昭和８年３月10日	昭和８年３月15日	西條八十	淡谷のり子
2	51091B＊	娘心も	昭和４年12月23日	昭和５年２月25日	浜田広介	佐藤千夜子
	26897-A	月夜の恋	昭和７年４月14日	昭和７年５月20日	佐藤惣之助	丸山和歌子
3	51464A＊	青い小鳥	昭和４年12月23日	昭和５年11月25日	不詳	佐藤千夜子
	27025-B	笛は冴ゆれど	昭和７年６月16日	昭和７年７月20日	佐藤惣之助	関種子
	A-2041B	青い小鳥は何処へ行く	昭和28年12月10日	昭和29年７月10日	野村俊夫	京町香江
4	26819-A	鳩笛を吹く女の唄	昭和７年２月８日	昭和７年２月17日	佐藤惣之助	井上静雄
	50491B※	旅の鴎	昭和11年８月７日	昭和11年８月25日	佐藤惣之助	藤山一郎
5	26826B	佳人よ何処へ	昭和７年３月２日	昭和７年３月20日	原阿佐緒	淡谷のり子
	15117A※	希望の花束	昭和９年10月３日	昭和10年２月15日	西岡水朗	楠木繁夫
6	26930-A	高原の唄	昭和７年５月10日	昭和７年７月１日	島田芳文	中野忠晴
	A-2373A	りんどう峠	昭和30年７月13日	昭和30年９月５日	西條八十	島倉千代子
7	27392-B	須磨行進曲	昭和８年３月24日	昭和８年４月１日	西條八十	中野忠晴
	15090B※	憧れの南洋	昭和９年12月21日	昭和10年１月10日	熊中文夫	楠木繁夫
8	27462-A	新興朝鮮の歌	昭和８年６月５日	昭和８年７月20日	河村梧郎	ミス・コロムビア
	27674-B	乙女椿	昭和８年11月14日	昭和８年12月20日	久保田宵二	竹田友紀子
9	27221-A	恋ごころ	昭和７年11月18日	昭和７年12月15日	西條八十	長谷川一郎
	15070B※	捨てた心	昭和９年11月９日	昭和９年12月１日	古賀政男	小ゆき
10	15030A※	国境を越えて	昭和９年６月25日	昭和９年７月15日	佐藤惣之助	楠木繁夫
	50538A※	護れ国境	昭和11年９月１日	昭和11年９月20日	佐藤惣之助	楠木繁夫
11	15031B※	男ごころ	昭和９年７月７日	昭和９年７月15日	佐藤惣之助	楠木繁夫
	50088B※	男のまごころ	昭和10年７月27日	昭和10年８月10日	佐藤惣之助	楠木繁夫
12	15031A※	宵の濡れ髪	昭和９年７月15日	昭和９年７月	佐藤惣之助	幾代
	50378A※	浪の漁火	昭和11年６月11日	昭和11年７月10日	佐藤惣之助	美ち奴
13	50179B※	二人きりなら	昭和10年12月２日	昭和10年12月26日	島田磬也	美ち奴
	A-1683A	見ないで頂戴お月様	昭和28年２月25日	昭和28年６月15日	野村俊夫	神楽坂はん子
14	50000B※	港シャンソン	昭和10年４月５日	昭和10年４月	佐藤惣之助	立花照也
	50275A※	拾った貞操	昭和11年３月17日	昭和11年４月15日	黒沼健	江川宇礼雄
15	50180B※	風に吹かれて	昭和10年12月19日	昭和11年１月10日	玉川映二	木村肇
	AK-82A	ひろしまの母	昭和52年５月25日	昭和52年７月１日	石本美由起	島倉千代子
16	50275B※	若い母の唄	昭和11年３月17日	昭和11年４月15日	佐藤惣之助	千早淑子
	1678A※	白薔薇は咲けど	昭和12年５月13日	昭和12年６月10日	佐藤惣之助	藤山一郎
17	50273A※	花見音頭	昭和11年３月６日	昭和11年４月15日	島田磬也	杵淵一朗、美ち奴
	1353B※	そりゃ無理ないわ	昭和12年２月25日	昭和12年２月	島田磬也	藤山一郎、奥田英子
18	50373B※	さらば青春	昭和11年６月中旬	昭和11年７月７日	佐藤惣之助	藤山一郎
	A-2412B	都に花の散る夜は	昭和30年９月28日	昭和30年12月10日	丘十四夫	青木光一
	KA-509A◎	浜昼顔	昭和49年	昭和49年６月18日	寺山修司	五木ひろし
19	1000B※	別れの歌	昭和11年10月29日	昭和11年11月15日	山川あさを	奥田英子
	A-278B	初恋の頃	昭和22年５月２日	昭和22年９月	西條八十	霧島昇
	A-1546B	りんどうの丘	昭和27年10月17日	昭和27年12月10日	松坂直美	奈良光枝
20	1167B※	櫛巻くずし	昭和11年12月13日	昭和11年12月25日	佐藤惣之助	美ち奴
	A-2433A	怒濤の男	昭和30年10月29日	昭和31年１月10日	野村俊夫	美空ひばり

	レコード番号	曲　名	録音年月日	発売年月日	作詞家	歌手名
21	1769A※	忠烈大和魂	昭和 12 年 7 月 22 日	昭和 12 年 8 月上旬	島田磬也	藤山一郎
	ALS-5193B	青春よ永遠に	昭和 47 年 7 月末～ 8 月	昭和 46 年 11 月 10 日	丘灯至夫	大川栄策
22	1863B※	強くなってね	昭和 12 年 7 月 14 日	昭和 12 年 8 月 10 日	倉仲住人	杉狂児、美ち奴
	A-1700B	モチのロン	昭和 28 年 4 月 18 日	昭和 28 年 6 月 10 日	上山雅晴	青木光一、神楽坂はん子
23	N115A※	どうせ往くなら	昭和 13 年 1 月 25 日	昭和 13 年 2 月 10 日	佐藤惣之助	三根耕一
	KC-7001◎	男の魂	昭和 46 年 1 月 30 日	昭和 46 年 4 月 20 日	中尾まさ志	田端義夫
24	N116A※	椿島田	昭和 13 年 1 月 13 日	昭和 13 年 2 月 10 日	佐藤惣之助	美ち奴
	A-1944A	湯の町椿	昭和 29 年 3 月 17 日	昭和 29 年 5 月 15 日	西條八十	神楽坂はん子
25	N138B※	心の雨	昭和 13 年 6 月 2 日	昭和 13 年 6 月 25 日	海野七郎	由利あけみ
	A-194B	嘆きの小鳩	昭和 21 年 11 月 25 日	昭和 22 年 2 月	藤浦洸	藤山一郎
26	N131B※	黄河の月	昭和 13 年 6 月 15 日	昭和 13 年 7 月 5 日	佐藤惣之助	三根耕一
	A-2351A	名月佐太郎笠	昭和 30 年 4 月 18 日	昭和 30 年 9 月 15 日	松坂直美	高田浩吉
27	N153B※	合歓の木蔭	昭和 13 年 7 月 5 日	昭和 13 年 8 月 1 日	倉仲房雄	岡蘭子
	100041-A	新妻鏡	昭和 15 年 3 月 19 日	昭和 15 年 4 月 10 日	佐藤惣之助	霧島昇、二葉あき子
28	100025A	りぼんむすめ	昭和 15 年 3 月 8 日	昭和 15 年 5 月 20 日	佐藤惣之助	渡辺はま子
	A-1721B	港の混血娘	昭和 28 年 5 月 22 日	昭和 28 年 8 月 15 日	石本美由起	京町香江
29	100355-B	北京の子守唄	昭和 16 年 6 月 24 日	昭和 16 年 10 月 20 日	佐藤惣之助	李香蘭
	A-2157B	渚の子守唄	昭和 29 年 10 月 4 日	昭和 29 年 10 月 20 日	西條八十	織井茂子
	ALS-5193A	友あればこそ	昭和 47 年 7 月末～ 8 月	昭和 47 年 11 月 10 日	なかにし礼	森繁久彌
30	100823B	雲のふるさと	昭和 18 年 9 月 3 日	昭和 18 年 12 月 8 日	大木惇夫	伊藤久男
	ALS-5040A	思い出は遠く哀しく	昭和 42 年 2 月 28 日	昭和 42 年 5 月 29 日	関沢新一	美空ひばり
31	A-146A	裏町セレナーデ	昭和 21 年 7 月 25 日	昭和 21 年 11 月 15 日	野村俊夫	霧島昇、二葉あき子
	SA791-B	慕情の街	昭和 36 年 12 月 11 日	昭和 37 年 2 月 20 日	野村俊夫	神戸一郎
32	未発売	月のしづく	昭和 19 年 11 月 10 日	未発売	大木惇夫	李香蘭
	A-312B	こゝろ月の如く	昭和 22 年 9 月 1 日	昭和 22 年 9 月下旬	西條八十	二葉あき子
33	A-278A	伊豆の七島	昭和 22 年 3 月 15 日	昭和 22 年 9 月	西條八十	小唄勝太郎
	A-1793B	月夜椿	昭和 28 年 10 月 14 日	昭和 28 年 11 月	西條八十	神楽坂はん子
34	A-623A	たそがれの湖	昭和 24 年 7 月 22 日	昭和 24 年 11 月 1 日	西條八十	近江俊郎
	SAS-1307A	筑後川エレジー	昭和 44 年 3 月 19 日	昭和 44 年 7 月 15 日	関沢新一	大川栄策
35	A-598A	思い出月夜	昭和 24 年 6 月 4 日	昭和 24 年 7 月 1 日	西條八十	霧島昇
	A-1368A	ギター月夜	昭和 27 年 1 月 25 日	昭和 27 年 4 月 15 日	西條八十	霧島昇
36	A-1078A	愛のカレンダー	昭和 25 年 12 月 1 日	昭和 26 年 3 月 15 日	西條八十	藤山一郎
	SAS-297B	胸のカレンダー	昭和 39 年 3 月 24 日	昭和 39 年 8 月 20 日	三浦康照	北原謙二
	ALS-5193B	彼のお気に入り	昭和 47 年 7 月末～ 8 月	昭和 47 年 11 月 10 日	阿久悠	ちあきなおみ
37	A-2233B	旅の兄妹流し	昭和 29 年 12 月 3 日	昭和 30 年 3 月 15 日	松井福太郎	永田とよこ、中島孝
	AA-116A	酒場えれじい	昭和 50 年 1 月 14 日	昭和 50 年 5 月 1 日	石本美由起	大川栄策
38	SAS-1091B	青春劇場	昭和 43 年 1 月 30 日	昭和 43 年 5 月 1 日	古賀政男	茜なゝこ
	ALS-5193A	もしもこの世がお芝居ならば	昭和 47 年 7 月末～ 8 月	昭和 47 年 11 月 10 日	古賀政男	美空ひばり

「レーベルコピー」（日本コロムビア株式会社所蔵）、「吹込報告書」昭和 9 年～ 13 年（テイチクエンタテインメント所蔵）、『古賀メロディ誕生七〇年記念　古賀政男大全集―二十世紀の遺産―』（日本コロムビア株式会社、1998 年）から作成。＊はビクター、※はテイチク、◎はミノルフォンを示す。